

盲目物語

谷崎潤一郎

青空文庫

わたくし生しょうこく国こくは近江おうみのくに長浜ながはま在ざいでござりまして、たんじょう《誕生》は天文にじ
 ゆう一ねん、みずのえねのとしてござりますから、当年は幾つになりますやら。左様、
 左様、六十五さい、いえ、六さい、に相成りましようか。左様でござります、両眼をうし
 ないましたのは四つのとくと申すことでござります。はじめは物のかたちなどほの／＼
 見えておりました、おうみの湖うみの水の色が晴れた日などにひとみに明あう映こりましたのを今
 に覚えておりますくらい。なれどもそのうち一ねんとたぬあいだにまったくめいしいに
 なりまして、かみしんじんもいたしましたがなんのきゝめもござりませなんだ。おやは百
 姓でござりましたが、十のとしに父をうしない、十三のとしに母をうしのうてしまいまし
 て、もうそれから申すものは所の衆しゅうのなさけにすぎり、人のあしこしを揉むすべをおぼ
 えて、かつく世過よこぎをいたしておりました。とこうするうち、たしか十八か九のとして
 ござりました、ふとしたことおだにから小谷のお城へ御奉公を取り持つてくれるお人がござりま
 して、そのおかたの肝きもいりである御城中へ住み込むようになったのでござります。
 わたくしが申す迄もない、旦那さまはよう御存知でござりましようが、小谷の城と申しま
 したら、浅井備前守長政公のお城でござりまして、ほんとうにあのお方は、お歳は若うて

もおりつばな大将でござりました。おんち、しもつけのかみ下野守久政公も御存生でいらつしやいまして、とかくお父子の間柄がよくないと申す噂もしやうムりましたけれど、それもとくは久政公がお悪いのだと申すことで、御家老がたをはじめおおぜいの御家来衆もたいがいは備前どの、方へ服しておられたようでもござりました。なんでも事のおこりというのは、長政公が十五におなりになったとし、いろいろ二ねんしようがつと云うのに元服をなされて、それまでは新九郎と申し上げたのが、そのときに備前のかみながまさとお名のりなされ、こうなん江南のぼつかんざい佐々木拔関齋の老臣平井加賀守どの、姫君をお迎えなされました。ところが此の御縁組みは長政公の御本意でのうて、久政公が云わば理不尽におしつけられたのだと申すこととござります。下野どの、かんがえお考では、江南と江北とは昔からたび／＼いくさをする、今はおさまっているようなれどもいつまた合戦がおこらないとも限らないから、和議のしるしに江南とこんいんを取りむすんだら、ゆくすえ国の乱れるうれいがないであろうと、左様に申されるのでムりましたけれど、備前守どのには佐々木の家臣の聳となると云うことをどうしてもおよろこびになりませなんだ。しかし父御のていごおいつけでござりますから是非なく承引なされまして、ひらい殿のひめぎみを一たんはおもらいになりましたもの、その、ち江南へ出むいて加賀守と父子の盃をしてまいれと云う久政公の仰せがありました

とき、これはいかにもむねんだ、父のめいをそむきかねて平井ふぜいのむこになるさえくちおしいのに、こちらから出かけて行つておやこのけいやくをするなどは以てのほかだ、弓馬の家にうまれたからは治乱の首尾をうかゞつて天下に旗をあげ、やがては武門の棟とうり梁ようともなるように心がけてこそ武士たるもの、本懐ほんかいだのにと仰おつしやつて、とうくその姫ぎみを、久政公へは御そう談もなしに里へかえしておしまいになりました。それはまあ、あまりと申せば乱暴な仕方で、てゝごの御腹立ごふくりゆうなされましたのも御尤もではござりますけれども、まだ十五六のおとしごろでそういう大きなころぎしを持つていらつしやると云うのは、いかにも尋常なお方でない、浅井の家をおこされた先代の亮政公に似かよつて、うまれながらに豪傑の氣象をそなえていらつしやる、こういう主君をいたゞけばお家の御運は万々代ばんくだいであろう、まことにあつぱれなお方だと、御家来しゆうがみな備前どの、御器量をおしたい申して、てゝごの方へは出仕しゆつしするものもないようになりましたので、ひさまさ公もよんどころなく家督をびぜんどのへおゆずりになりました、ごじしんは奥方の井の口殿をおつれになつて、竹生島ちくぶしまへこもつていらつしたこともあるそうでござります。

けれどもこれはわたくしが御奉公にあがりました以前のござりまして、当時は父

子のおんなかもいくぶんか和ぼくなされ、下野どのもいのくちどのもちくぶ島からおかえりになりました、お城でくらししていらつしやいました。長政公は二十五六さいのおとしでござりましたろうか、もうそのときは二度めの奥方をおむかえになつていらつしやいました、そのおくがたと申されますのが、もつたいたなくも信長公のおん妹君、お市のでござります。この御えんぐみは信長公が美濃のくにより御上洛のみぎり、いま江州できりよのすぐれた武将と申せば、歳はわかくてもあさいびぜんのかみに越すものはあるまじ、ひとえに味方にたのみたいとおぼしめされて、なにとぞわが縁者となつてくれぬか、それを承引あるうえは浅井と織田とちからをあわせて観音寺城にたてこもる佐々木六角を攻めほろぼして都へ上り、ゆく／＼は天下の仕置きも兩人で取りおこなおう、みの／＼にも欲しくばそちらへ進ぜよう、またえちぜん越前の朝倉は浅井家とふかい義理のある仲だから、決して勝手に取りかゝるようなことはしませぬ、越前一国はそちらの指図通りと申す誓紙を入れようなど、それは／＼御ていねいな言葉がござりましたので、その儀ならばと申すことで、御縁がまとまったのでござります。それにつけても佐々木の家臣の姫君をおもらいなされて抜関齋の下風にお立ちなさるところを、きつくおことわりなされたばかりに、当時しよこくを切りなびけてとぶとりをおとす信長公からさほどまでにお望まれなされ、

織田家のむこにおなりなさろうとは。それもまあ、武略がすぐれていらした故とは申しながら、人は出来るだけ大きな望みを持つべきものでござります。不縁におなりなされました前のおくがたは、ものゝ半年と御一緒におくらしはなかつたそうで、そのおかたのことは存じませぬが、お市御料人ごりようじんはまだお輿入れこしいにならぬうちから世にも稀なる美人のきこえの高かつたお方でござります。御夫婦なかもいたつておむつまじゅうござりまして、お子たちも年子としごのようにお生れなされて、もうそのときに、若君、姫君、とりまぜて二三人はいらつしやいましたかと存じます。いちばんうえの姫君はお茶々どのと申し上げて、まだいたいけなお児でござりましたが、このお児が後に太閤殿下の御ちようあいをおうけなされ、かたじけなくも右だいじん秀頼公のおふくろさまとおなりなされた淀のおん方であらせらりようとは、まことに人のゆくすえはわからぬものでござります。でもお茶々どのはその時分からすぐれてみめかたちがおうつくしく、お顔だち、鼻のかっこう、めつきくちつきなど奥方に瓜二つだと申すことで、それは盲もくのわたくしにもおぼろげながらわかるような気がいたしました。

ほんとうにわたくしふぜいのいやしいものが、なんの冥加みょうがであゝ云うとうといお女中がたのおそばちこう仕えますことができましたのやら。はい、はい、左様でござります、ま

えにちよつと申し上げるのをわすれましたが、最初はわたくし、さむらい衆の揉みりようじをいたすということでござりましたけれども、城中たいくつのおりなどに、「これ、これ、坊主、三味せんをひけ」と、みな衆に所望されまして、世間のはやりうたなどをうとうたことがござりますので、そんな噂が御簾中へきこえたのでござりましょう、唄の上手なおもしろい坊主がいるそうなが、いつペンその者をよこすようにとのお使いがござりまして、それから二三ど御前へうかゞいましたのがはじまりだったのでござります。はい、はい、いえ、それはもう、あれだけのお城でござりますから、武士の外にもいろ／＼のひとが御奉公にあがっております、猿ざる樂がくの太夫なども召しかゝえられておりましたので、わたくしなどが御きげんを取りむすぶまでもござりませぬけれども、あゝ云う高貴なお方には却つてもござまのはやりうたのようなものがお耳あたらしいのでござりましょう。それにそのころはまだ三味線がいまのようにひろまってはおりませんで、ものずきな人がぼつ／＼けいこをするというくらいでござりましたから、そのめずらしい糸のねいろがお気に召したのでござりましょう。さようでござります、わたくし、このみちをおぼえましたのは、べつにさだまった師しようについたのではござりませぬ。どういふものか生来おんぎよくをきくことをこのみ、きけばじきにそのふしを取って、おそわらずともしぜ

んにうたいかなでるといふ風でござりまして、しゃみせんなぞもたゞおり／＼のなぐさみにもてあそんでおりましたのが、いつしか身についた能となつたのでござります。なれどもゝとよりしろうとの手すさびでござりまして、人にきいていたゞくほどの芸ではござりませなんだのに、つたないところがあいきようになりましたものか、いつもおほめにあずかりまして、お前へ出ますたびごとにつこうなかずけ物を下されました。まあその時分は、戦国のことゝて彼方あつち此方こちにかつせんのためはござりませなんだが、いくさがあればそれだけにたのしいこともござりまして、殿様が遠く御出陣あそばしていらつしやいますと、お女中がたはなんの御用もないものですから、つい憂さはらしに琴などを遊ばしますし、それから又、ながの籠城のおりなどは気がめいつてはならぬと云うので、表でも奥でも、とき／＼にぎやかな催しがあつたりいたしまして、そう今のひとが考えるほどおそろしいことばかりでもござりませなんだ。とりわけおくがたは琴をたんのうにあそばしまして、つれ／＼のあまりに掻きならしていらつしやいましたが、そう云うおりにふとわたくしが三味線をとつて、どのような曲にでもそくぎにあわせて弾きますと、それがたいそう御意ごいにかなつたとみえまして、器用なものじゃと云うおことばで、それからずっと奥むきの方へつとめるようになりました。お茶々どのも「坊主、坊主」とまわらぬ舌でお呼

びになつて、あけくれわたくしを遊び相手になされまして、「坊主、瓢箪のうたをうたつておくれ」と、よくそんなことを仰おつしやつて下さりました。あゝ、そのひょうたんのうたと申しますのは、

忍ぶ軒端に

瓢たんはうゑてな

おいてな

這はせてならすな

こゝろにつれてひよくら

ひよく〜めくに

と、こう唄うのでござります。

あら美しの塗ぬり壺つぼ笠がさや

これこそ河内陣みやげ

えいころえいと

えいとろえとな

傷口がわれた

心得て踏^ふまへて

とゝら

えいとろえいと

えいとろえとな

まだこのほかにもいろ／＼あったのでござりますが、ふしはおぼえておりましてことはも詞をわすれてしまいました、いやもう年をとりますとたわいのないものでござります。そうするうちに信長公と長政公と仲たがいをなされまして、両家のあいだにいくさがはじまりましたのは、あれはいつごろでござりましたか。あゝ、姉^{あねがわ}川の合戦が、元龜がんねんでござりますか。こういうことは旦那さまのものゝ本を読んでいらつしやるおかたの方がよく御存知でござります。なんでも御奉公に出ましてから間もないこととござりまして、不和のおこりと申しますのは、のぶながこうが浅井どのへおことわりもなしに、えちぜんの朝倉どのの領分へおとりかけなされたのでござります。いったい浅井のお家と申すのは、先々代すけまさ公のとき、あさくらどのゝ加勢によつて御運をおひらきなされまして、それ以来あさくらどのには恩ぎをうけておられます。さればこそ織田家と御えんぐみのときにも越前のくにゝは手をつけぬと、信長公よりかたいせいしをおとりになつたのでござり

ましたが、わずか三ねんとたゝないうちにたちまち誓紙をほごにして、当家へいちごんのあいさつもなく手入れをするとはけしからぬ、信長という奴は軽薄ものだ、だいに御隠居の下野どのが御りつぶくで、長政公の御殿へおいでになりました、近きんじゆう習とぎま

《外様》の者までもおあつめになつて、のぶながの奴、いまにえちぜんをほろぼして此のしろへ攻めてくるであろう、えちぜんのくにの堅固なあいだに、朝倉と一味して信長を討ちとつてしまわねばならぬと、えらいけんまくでござりましたところが、長政公もごけらいしゆうも、しばらくはことばもござりませなんだ。それはまあ、やくそくをほごにすると云うのは信長公もわるうござりますけれども、あさくらどのも両家のあいだにやくそくのあるのをよいことにして、織田家へぶれいなしうちをしている。ことに信長公たび／＼の御上洛にもかゝわらず、一ども使節をさし上げられたこともないので、それでは禁裏きんりさまや公方くぼうさまにも恐れ多い。しよせん織田どのを敵にまわしてはたとい朝倉と一つになつても打ちかつ見込みはござりませぬから、いまの場合はえちぜんの方へ申しわけに千人ばかりも加せいを出して、織田家の方はなんとか巧うまくつくろつておいたらいかゞでござりますと、そう申す人たちが多いのでござりましたが、それをきかれると御いんきよはなお怒おこられて、おのれら、末座のさむらいとして何を申す、いかに信長が鬼神なればとて、親の

代からの恩をわすれ、あさくら家の難儀をみすて、よいとおもうか、そんなことをしたら末代までの弓矢の名折れ、あさい一門の耻辱ではないか、わしはたった一人になつてもさような義理しらずのおくびようものゝ真似はせぬと、まんぎをねめつけて威丈いたけだかになられますので、まあ、そう御たんりよに仰せられずによく御分別なされましてはと、老臣どもが取りつきまして、おのれら、みなが此の年寄りを邪魔にして、皺腹を切らせるつもりじやなど、身をふるわせて齒がみをなされます。総じて老人と云う者は義理がたいものでござりますから、そう仰おつしやるのも一往はきこえておりますけれども、まえ／＼から家来どもがじぶんをばかにするといふ僻ひがみをもつていらつしやるどころへ、長政公がせつかく自分の世話してやつた嫁をきらつてお市どのを迎えられたということ、いまだにふくんでいらしつて、それみたことか、おやのいいつけをそむいたればこそこんな仕儀になつたではないか、この期ごにおよんであのおうそつきの信長になんの遠慮をすることがある、こうまであなごられながらだまつて引つ込んでいるというのは、おおかた女房のあいさにほだされて、織田家へ弓がひけぬとみえた、と、いくぶんか長政公へあてつける気味もあつたのでござります。びぜんのかみどのは御いんきよと御けらいしゆうとのあらそいを無言できいていらしつて、そのときにほつとためいきをなされ、なるほど、ちゝう

えの仰せはお道理じや、自分はのぶながの智だけれども先祖以来の恩にはかえられぬ、こちらへ取つてある誓紙は明日あしたさつそく使者にもたせて織田家へかえしてしまひましよう、信長いかに虎狼ころうのいきおいにほこつておつてもえちぜんぜいと力をあわせて無二の一戦をいたすならば、やわか彼を討ち取れぬことがござろうぞと、きつぱりと仰せになりましたので、そのうえは仕方なく、みなが決心をかためたのでござります。

しかしそのゝちも、いくさ評定ひょうじようのたびごとに御いんきよとながまさ公との御料簡ごりようけんがちごうて、とかくしつくりいかなんだようでござりました。ながまさ公は名將のうつわ器でいらつしやいますし、ゆうきりんくたる日ごろの御きしようでござりますから、出足であしのはい信長をてきに廻してこうゆるくとしてはならぬ、こちらから逆にせめのぼつて一とかつせんした方がよいと、そう云うおかんがえてござりましたけれども、御いんきよは年よりのくせで、なにごとにも大事をとろうとなされますので、かえつて不利をまねくようになりました。信長公がえちぜんから都へ引きとられましたときにも、此のあいだに朝倉ぜいと一手になつて、美濃へきり込んで、岐阜をせめおとしてしまおう。さすれば信長さつそくに馳せくだらうとするであらうが、江南には佐々木ろつかく《六角》の一族がいるからやすく通すはずはあるまいし、そのまに岐阜から取つてかえして、佐和山お

もてにまちかまえてかつせんすれば、のぶながのくびはわがものになると、長まさ公がごふんべつをめぐらされ、あさくらどのへ使者をおつかわしになりましたけれども、一乗の谷の館やかたにもやはり気ながな人たちがそろつていまして、はる／＼みのへ出かけていつてあとさきを敵につゝまれたら難儀になろうと、義景公をはじめだれも同心するものがござりませなんだ。それで御返事には、いや、それよりも、いずれ信長が小谷のお城へおしよせてまいりましようから、そのとき当国のにんずをもよおしてお味方に参じましよう、と、そういうごあいさつでござりましたので、あたら《可惜》ごけいりやくがむやくになつたのでござります。長政公はそのへんじをきかれると、あゝ、朝倉もそんな悠長なことを申しておるのか、それで義景のじんぶつもわかつた、そのようなろまなことであのすばしっこい信長に勝つみこみなど、十に一つもあるうとはおもわれぬ、父上の仰せがあつたばかりによしな人に組みしたのが運のつきだと、しみ／＼述懐あそばしたそうでござりますが、もうそのときから浅井の家もわがいのちも長いことはあるまいと、かくごをきめられたらしゆうござります。

それから姉川、さかもとの合戦がござりまして、いちどは扱いになりましたけれども、たちまち和議もやぶれてしましまして、織田ぜいのためにじり／＼と御りようぶんけずを削られ

てゆきました。まことに名将の仰おほつしやつたことにまちがいはなく、長政公のおことばがおもいあたるのでござります。わずか二三ねんのあいだに、佐和やま、よこやま、大尾、あさづま、宮部、山本、大嵩の城々をおい／＼にせめ抜かれて、小谷の本城ははだか城にされ、その麓まで敵がひし／＼と取りつめてまいつたのでござります。よせては六万余騎のぐんぜいをもつて蟻のはいでるすきまもなく十重とえ二十重はたえに打ちかこみ、のぶなが公をそうだいしようとして、柴田しゆりのすけ、にわ五郎ざえもん、佐久間うえもんのじょうなど、きこゆるゆうしが加わつておりました。太閤でんかも当時は木のした藤きちろう《吉郎》と申されて、おしろから八丁ばかりの虎御前山にとりでをきずいて、城内のようすをうかゞつておられました。あさいどの、御けらいにもずいぶんりっぱな大将たちがおられましたけれども、これはとたのみきつたる者もこゝろがわりがいたしまして、だん／＼織田どのへ降人に出まして、味方のいきおいは日にまし弱るばかりでござります。おしろの中は、人質のおんな子供をとりこめてありますし、ほう／＼の小城から落ちてまいつた侍どもがおりますし、つねよりもおおぜいの人数にんずでござりましたから、さいしよはなな／＼気が立つておりました、「憂きも一と時うれしさも思ひさませば夢候そとろよ」と、小唄まじりに日ごと夜ごとのせりあいをつゞけておりましたが、そのうちに、御いん居ひさまさ公

の丸まると長政公の丸のあいだの、中の丸をあずかっておられた浅井七郎どの、おなじく玄蕃のすけどのなどが、藤吉郎どのにないつうしまして、てきをその丸の中へ引き入れましたので、俄かにじょうちゆうが火のきえたようになりました。そのときのぶなが公のお使者がみえて申されますのに、その方と仲たがいをしたというのも元はといえは朝倉のことからだ、しかしこちらはすでに越前をきりなびけ、義景をうちとてしまったから、その方にたいしなんの意趣いしゆをもいだかぬし、又そのほうもこのうえ義理をたてるどころもないであらう。しろをあげわたして立ちのくならば、えんじやのよしみもあることだからこちらも如在じよさいには存ぜぬ、このゝち織田家のきか麾下にぞくして忠節をぬきんでゝくれるなら、大和一国をあておこのうてもよいとおもうがと、ねんごろな御ご誼じでござりました。おしろの中ではよいところへ扱いがはいったと云つてよろこぶ者もあり、いやゝ、これは織田どのゝほんしんではあるまい、妹いもうと御ごのおいちどのを助けだしておいてから、殿にお腹をめさせようと云う所存であろうと申す者もあり、評議はまちゝでござりましたが、なごまさ公は使者にたいめんあそばして、おこゝろぎしのほど忝く存じますけれども、かようになりはてゝ何を花香かこうと世にながらえましよう、たゞ討死をとげるつもりでござりますから、御前ごぜんへよきなにお伝え下されと仰つしやつて、いつこうに承引なされませなんだ。

のぶなが公は、さては自分を疑うとみえる、こちらはしんじつに申すのだから、ぜひ討死をおもいとまつて、こゝろやすく立ちのくようにと、さいさん使者をよこされましたが、いったん覚悟をきわめたうえはと、いかに申されてもおきゝ入れがござりませなんだ。それで、八月二じゆうろくにちの宵に、御菩提寺の雄山わじよう《和尚》をおまねきになりまして、小谷のおくの曲谷のいしきりに石塔をお切らせになり、徳勝寺殿天英宗清大居士とかいみようをえりつけられ、その石とう《塔》のうしろをくぼめて御自筆の願書をおこめになりました。それから二十七日のあさはやくろうじようの侍どもをおあつめになり、ゆうざんわじようを導師にたゝせて、長政公はせきとうのそばにおすわりなされ、御けらいしゆうの焼香をおうけになりました。みなのはしゆうはさすがに辞退されましたけれども、たつてのおことばゆえ焼香したのでござります。さてその石塔は、しのんで城からはこび出しまして、みずうみのそこふかく、竹生しまから八丁ばかりひがしの沖へしずめましたので、それを見ました城中のものどもは一途いちずに討ちじに心をかけるようになったのでござります。

おくがたはちようどそのとしの五月に若君をおうみなされ、さんごのおつかれで一と月あまりひきこもつていらつしやいましたので、わたくしがしゞゆうごかいほう申し上げ、お

肩やお腰をさすりましたり、せけんばなしのお相手をつとめましたりいたしまして、おなぐさめ申しておりました。左様でござります、ながまさ公は御きしよはたけくいらつしやいました、おくがたにはいたつておやさしゅうござりまして、ひるはいちにち命をまとはげしい働きをなさりながら、おくごてんへおこしになりますと御きげんよく御酒ごしゆをまきこしめされ、何くれとおくがたをいたわつてお上げなされて、お女中がたやわたくしどもへまでじようだんを仰おつしやつたりしまして、いくまんの敵がしろのぐるりをかこんでいることもとんとお心にとまらぬようでござりました。なにぶん大名がたの御夫婦仲のことは、おそばにつかえております者にもなかくわかりかねますけれども、おくがたはおん兄君と殿さまのなかにはさまれて胸をいためていらしたのでござりましようし、ながまさ公の方はまた、それをいとおしゅう、いじらしゅうおぼしめされ、かたみのせまいおもいをせぬようにと、つとめておくがたの氣をひきたてゝいらしたのでござりますまいか。そう云えばあのじぶん、御前にひかえておりますと、「これ坊主、三味せんもゝう面白うない、酒のさかなにもつとうきくしたことはないか、あの棒しばりを舞つてみせぬか」などゝ殿のおこえがかゝりまして、

十七八は

竿にほした細布

とりよりや

いとし

たぐりよりや

いとし

糸よりほそい

腰をしむれば

たんとなほいとし

と、つたないまいをごらんに入れては御座輿をつとめたものでござります。それはわたくし、じぶんでかんがえ出しました道化どうけたまいでござりまして、「糸よりほそい腰をしむれば」と、所作しよさをしておめにかけますと、たいていのかたは腹をかくてわられますので、めくらのくせに妙なてつきで舞いますところがおかしみなのでござりましたが、なみいるかた／＼の賑やかなおこえにまじつて、おくがたのおわらいなさるおこえがきこえますときは、「あゝ、すこしはごきげんがよいのだな」とおもいまして、どんなにわたくしも勤めがいがありましたことか。なれどもたいへん悲しいことには、おい／＼日がたつにつ

れまして、いくらわたくしが新しい手をかんがえましておもしろおかしくまっつてごらんにいれましても、「ほゝ」とかすかにえまれるばかりで、やがてそれさえもきこえないことがおおくなつてまいりました。

あるひのこと、あまり肩がこつてならぬから、すこしりようじをしてほしいと仰つしやいますので、おせなかの方へまわりまして揉んでおりますと、おくがたはしとねのうえにおすわりなされ、きようそく脇息におよりあそばして、うつら／＼まどろんでいらつしやるのかと思われましたが、そうではなくて、とき／＼ほつとといきをついていらつしやいます。

こういうおりに、いぜんにはよくお話相手をいたしましたのに、ちかごろはめつたにお言葉のさがることなどもござりませんので、たゞかしこまつてりようじをいたしておりましてたけれども、それがわたくしにはなんとのう氣づまりでなりませなんだ。ぜんたいめしいと申すものは、ひといちばいかんのよいものでござります。ましてわたくしは、ひごとよごと奥がたのあんまを仰せつかりまして、おからだの様子がとおよそ分つておりますので、おむねのなかのことまでがしぜんと手先へつたわつてまいりますせいか、だまつて揉んでおりますうちに、やるせないおもいがいつぱいにこみあげてまいりますのでござります。当時おくがたは二十をふたつみつおこえなされ、四人にあまるお子たちの母御はごでいらつしやい

ましたけれども、根がおうつくしいおかたのうえに、ついぞいまゝでは苦勞という苦勞もなされず、あらいかぜにもおあたりなされたことがないのでござりますから、もつたいないことながら、そのにくづきのふつくらとしてやわらかなことゝ申したら、りんずのおめしものをへだてゝ揉んでおりまして、手ざわりのぐあいがほかのお女中とはまるきりちがつておりました。もつともこんどは五たびめのお産でござりましたから、さすがにいくらか窶やつれていらつしやいましたものゝ、おやせになればおやせになるで、その骨ぐみの世にたぐいもなくきやしやでいらつしやることはおどろくばかりでござりました。わたくし、じつに、このとしになりますまで、ながねんのあいだもみりようじを渡世とせにいたし、おわかいお女中さまがたをかざしれず手がけてまいりましたが、あれほどしなやかなからだのおかたをいろいろたことがござりませぬ。それに、おんはだえのなめらかさ、こまかさ、お手でもおみあしでもしつとり露をふくんだようなねばりを持っていらしたのは、あれこそまことに玉の肌はだえと申すものでござりませうか。おぐしなども、お産をしてからめつきりと薄うなつたと、ごじゝんでは仰つしやつていらつしやいましたが、それでもふさくとうしろに垂らしていらつしやるのが、普通のひとにくらべたらうつ鬱陶陶とうしいくらいたくさんにおありになって、一本々々きぬいとをならべたような、細い、くせのない、どっし

りとおもい毛のたばが、さら／＼と衣きぬにすれながらお背なかいちめんちめんにひろがつておりまして、お肩を揉むのにじやまになるほどでござりました。なれども、このとうとい上じょうろ

藤とうのおみのうえもおしろがらくじようするときはどうなるだろうか。このたまのおんはだえも、たけなすくろかみも、かぼそいほねをつゝんでいるやわらかい肉づきも、みんなおしろのやぐらといっしよにけぶりになつてしまふのだろうか。ひとのいのちをうばうことがせんごくの世のならないなればとて、こんなたいけなおうつくしいかたをころすという法があるものだろうか。のぶなが公もげんざい血をわけたいもうと御ごを、たすけておあげなさろうというおぼしめしはないものか。まあわたくしのようなのが、そんなしんばいをしましたからとておよばぬこととござりますけれども、えんあつておそばにおつかえ申し、なんのしあわせかめしいと生れましたばかりにこのようなおかたのおんに手をふれ、あさゆうおこしをもませていたゞいておりまして、たゞそのみをいきがいのある仕事とぞんじておりましたのに、もうその御奉公もいつまでだろうかとかんがえましたら、このさきなんのたのしみもなくなりまして、にわかにわかに胸むねがくるしゆうなつてまいりました。するとおくがたが又ほつとためいきをあそばして、

「弥市」

と、およびになるのです。わたくし、おしろいの中では、「坊主、坊主」といわれておりましたが、「たゞ坊主ではいけぬ」と仰つしやつて、おくがたから「弥市」という名をいたゞいておったのでござります。

「弥市、どうしたのだえ」

と、そのときかさねてのお言葉に、

「はっ」

と申して、おどくいたしておりますと、

「いっこう力がはいらぬではないか、もそつときつうもんでおくれ」

と仰つしやるのでござります。わたくしは、

「おそれいました」

と申しあげて、さてはいらざる取りこしくろうに手の方がおろそかになったかと、気を入れかえてせつせともんでおりました。なれどもきようはとくべつにお肩がこつていらつして、おんえりくびのりようがわに手毬ほどのまるいしこりがおできになっておりました、もみほごすのがなかく凝なのでござります。まあ、ほんとうに、これではさぞかしおつらかろう、こんなにおこり凝になるというのは、きつといろく凝なものあんじをあそばして、

よるもろくくおやすみにならぬせいではないか、おいたわしいことだわいと、お察し申しあげておりますと、

「弥市」

と仰っしゃって、

「お前、いつまでこのしろのなかにいるつもりなのだえ」と、仰っしゃるのでした。

「はい、わたくしは、いつまでゞも御奉公をいたしておりとうござります。ふつゝかなものでござりますから、おやくにはたちませぬが、ふびんにおぼし下されまして召しつかつていたゞけましたら有りがたいこととござります」

そう申しあげましたら、

「そうかえ」

と仰っしゃつたなり、しばらくしずんでいらしつて、

「それでもお前、知つてのとおりおおぜいの者がいつのまにか一人へり二人へりして、もうおしろにはいくにんも残つていないのですよ。りっぱな武士でさえ主しゅをみすて、おちてゆくのに、さむらいでもないものがたれにえんりよをすることがあろう。ましておまえは

眼が^{不自由}ふじゆうなのだから、まご^くしていているとけがをしますよ」
と仰つしやるのです。

「おおせはありますがとうござりますが、おしろを捨てるのもふみとゞまるのも、それはひと／＼のこゝろまかせでござります。まなこさえあいておりましたら、夜に^{よる}まぎれておちのびることもできましようけれども、このように四方をかこまれておりましてはたといおいとまをいたゞきましてもわたくしには逃げるみちがござりませぬ。どうせ数ならぬめくら法師ではござりますが、なまなかてきにとらえられてなさけを受けるのはいやでござります」

すると、なんともおことばはなくて、そつとおんなみだをおふきになつたらしゆう、ふところからたとうがみをお出しになるおとがさら／＼ときこえました。わたくし、じぶんの身よりもおくがたはどうあそばすおつもりか、いずこ迄もながまさ公とごいつしよにおいであそばすのか、五人のお子たちをいとおしゆうおぼしめしたら、また御りようけんもありませんはしないかと、こゝろではやきもきいたしました、そんなことをさしでがましゆう伺うわけにもまいりませぬし、それきりおこえもかゝりませぬので、ついつぎほがなくて、ひかえてしまったのでござりました。

それが、あのせきとうの御供養のありました二日ほどまえのことでござりまして、八がつ二十七日のあけがた、さむらいがたの焼香をおうけになりますと、こんどはおくがたや、お子たちや、腰元衆や、わたくしどもまでをそこへおめしになりました、「さあ、おまえたちも回向をしておくれ」と仰っしゃるのでござりました。なれどもいぎとなりますと、お女中がたのかなしみは又かくべつでござりまして、あゝ、それではいよくお城のうんめいがきわまつて、とのさまはうちじにあそばすのかとどなたも途方にくれるばかりで、一人もしようこうの席へすゝもうとはなさりませぬ。このにさんにち寄せ手は一そうはげしくせめてまいりまして、ひるもよるも合戦のたえまはござりませなんだが、けさはさすがに敵もいくらか手をゆるめたとみえまして、お城のうちもそともしんとして、大ひろまの中は水をうったようにしずかでござります。おりふし秋もなかばのことでござりまして、おうみの国もほつくくにちかい山の上の、夜もあけきらぬほどの時こくでござりますから、まつぎにひかえておりますと、肌さむいかぜがひえ／＼と身にしみ、お庭の方でくさばにすだくむしのねばかりがじい／＼ときこえるのでござります。と、ふいに広間のすみの方で、どなたか一人しく／＼とすゝりなきをはじめましたら、それまでじつとこらえていらしたおおぜいの衆が、あちらでもこちらでも、いちどにしく／＼と泣き出されました

ので、がんぜないお子たちまでがこえをあげてお泣きになりました。「これ、これ、そなたはいちばんとしかさのくせに泣くということがありますか、かね／＼云うてきかせたのはこのことではありませぬか」と、おくがたはこんなときにも取りみだした御様子がなく、しつかりしたおこえでお茶々どのお叱りになって、嫡男万福丸どの、乳母うぼをお呼びになりました、「さあ、和子わこから先にしようこうをするのですよ」と仰っしゃるのです。それでいちばんに万福丸どの、二ばんには当歳の若わかが御焼香をすまされますと、「お茶々、そなたの番ですよ」と仰せられました、

「いや、姫よりもそなたはなぜしないのだ」と、ながまさ公がきつとなって仰せられるのです。おくがたはたゞ「はい／＼」と口のうちに仰っしゃるばかりで、なか／＼承引なされませぬので、

「あれほど申しきかせたことがなぜ分らぬ。この期ごにおよんで云いつけにそむくつもりかと、つね／＼おくがたにはおやさしいおかたが、ことさらあら／＼しく仰っしゃるのでござりますけれども、

「おぼしめしはかたじけのうござりまするが」

と、かたくけつしんをあそばして、座を立とうとはなさりませなんだ。そのときながまさ

公はだいおんをおあげになつて、

「やあ、その方おんなのみちを忘れたか。わがなきあとの菩提をとぶらい、子どものせいじんをみとゞけるこそ、つまたるものゝ勤めではないか。その道理がわからぬようではみらいえい永劫ごう妻とはおもわぬ、夫とも思つてもらわぬぞ」

と、するどくお叱りになりました。そのおこえがひろまのすみ／＼へりん／＼とひゞきわたりましたので、いちどうはつといたしまして、どうなることかといきをころしておりますと、しばらくなんのものおともござりませなんだが、やがてさや／＼と畳のうえにお召しものゝするけはいがいたしましたのは、こゝろならずも奥がたがごしよう香をなされたのでござりました。それから一のひめぎみのお茶々どの、二の姫ぎみのおはつどの、三のひめ君の小督こさくどのと、しだいに御えこうをなされましたので、そのよのかた／＼もとゞこおりなく済まされたのでござります。

さてその石とうをはこび出してこすいにしずめましたことは、せんこく申し上げたとおりでござります。おくがたはひと／＼の手まえ、いったんはおきゝいれになりましたものゝ、殿が御しようがいあそばすのに、わがみひとり世にながらえてなんとしようぞ、あれこそ浅井のようぼうよと人にうしろゆびをさゝれるのはくちおしゆうござります、ぜひ

死出のみちづれをさせて下されと、よもすがら搔きくどかれて、いつかな御しよういなさるけしきもなかったそうにござります。するとあくる二十八にちの巳みの刻ころに、織田どの、おんつかい不破河内のかみどのが三度目におこしになりまして、いま一ぺんかんがえなおして降人に出る気はないかと、のぶなが公のおことばをつたえましたのでござります。ながまさ公はかさね／＼のおぼしめし、しよう／＼世々わすれがたくは存じます。が、じぶんはどうあつてもこのしろにおいてはらを切ります、たゞし妻とむすめどもはおんなのことなり、のぶなが公にちすじのつながるものどもでござれば、申しふくめてあとより送りとゞけます、せつかくのおなさけにあのものたちのいのちをゆるして、あと／＼のせわを見てやって下さればありがとう存じますと、いんぎんにおたのみなされまして、一とまずかわちの守どのをおかえしになり、それから又おくがたへだん／＼と御いけんをなされたらしゆうござります。もとよりながまさ公とても、あれほどおむつまじいおん語らいでござりましたから、死なばもろともと覚悟をなされたおくがたのおんこゝろねを何しに憎く思しめしましう。おもえばおふたりが御えんぐみをあそばしてから、ことしで足かけ六ねんと申すみじかいおんちぎりでござります。そのあいだし／＼ゆう世の中がさわがしく、あるときはとおく都や江南の御陣へお出かけになったりしまして、いちにちとし

てあんらくにおすごしあそばしたこともないのでござりますから、おなじはちすのうてな
 の上でいつまでも仲ようくらしたいとおのぞみになるのも、決してごむりではござりませ
 ぬ。なれどもながまさ公は勇あるおかたのつねとしてひとしおん憐れみがふこうござり
 まして、おとしのわかいおくがたをむぎくころしてしまふことがあまりおいたわしく、
 なんとかしていのちをたすけてあげたいとおぼしめされ、ことにはお子たちのゆくすえな
 ども御あんじあそばしたのでござりましょう。まあいろくにしなをかえて道理をおとき
 になつたものとみえまして、ようくおくがたも御とくしんあそばし、ひめぎみばかりを
 おつれになつておさとへお帰りあそばすことにきまつたのでござります。おとこのお子た
 ちはまだいとけのうござりましたけれども、敵の手におちてはあやういと申されて、総り
 ようのまんぷく丸どのはえちぜんつるがごおりのくに敦賀郡のしるべをたよりに、二十八日の夜よるおそ
 く、きむら喜内之介と申す小姓をつけてそつとおしろからお出しになり、すえの若きみは、
 当国の福田寺へあずけられることになりました、これもその夜よのうちに、小川伝四郎中島
 左近と申すさむらい二人に乳母がつきそうて、ふくでん寺のちかくの湖水のきしに船をよ
 せられ、しばらく蘆のしげみのあいだにひそんでおられたと申すことでござります。
 おくがたは二じゆうはち日の夜ひとよ、ながまさ公とおんわかれの盃をおかわしになりま

したが、つきぬおん名残りにさま／＼のおんものがたりをあそばすうちに、秋の夜ながらもいつのまにかあけてしまいましたので、それではと申されて、ひがしの方がもうしら／＼とあかるい時分、おしろの門からおのりものにおめしになりました。つゞく三つのお乗りものにはさんにんの姫たちが乳母とごいっしよにお召しになりました。藤掛三河守と申す、お輿入れのおり織田家からついてまいりました奥向きの御けらいが、てぜいをつれて前後をおまもり申し上げ、そのほかに二三十人のお女中がたがおともをいたして小谷をあとなされました。ながまさ公は御のりものゝきわまでおみおくりに出られまして、そのあさはもうこれを最後の御しようぞくで、くろいとおどしのおんよろいにきんらんの袈け褌さをかけていらしったそうでござります。いよく／＼おのりものをかき上げますとき、「ではあとをたのんだぞ、たっしやでくらせよ」とおことばをおかけになりましたのがゆうきのほりきったさわやかなおこえでござりました。おくがたも「おこゝろおきのう御りつばなおはたらきを」と、感じようにおっしやつて、おんなみだをおみせにならずに、じつとがまんをなされましたのはさすがでござります。すえのおふたりのひめぎみたちは西もひがしもおわかりにならぬほどでござりましたから、お乳ちの人の手におだかれになって、なんのことゝも夢中でいらっしやいましたけれども、おちやく／＼のはてゝ父ご御の方をふりか

えりく、いやじやくときつうおむずかりになりました、なかくなだめすかしてもお泣きやみになりませんので、お供のひと／＼はそれをみるのが何よりつろうござりしました。この姫たちが三人ながらのちに出世をあそばして、お茶々どのが淀のおん方、おはつどのが京極さいしよどの、おん奥方常高院どの、いちばんすえの小督どのこさうが忝くもいま將軍家のみだいでおわしますことを、だれがそのときおもいましたでござりましょう。かえす／＼も御運の末はわからぬものでござります。

のぶなが公はおいちどのや姪御たちをお受けとりになりますと、たいそうおよろこびになりますして「ようふんべつして出て来てくれた」と、ねんごろに仰っしゃって、「あさいにもあれほどことばをつくして降参をすゝめたのに、どこまでもきゝ入れないのは、あつばれ名をおしむ武士とみえた、あれを死なすのはじぶんのほんいでないけれども、ゆみやとる身の意地であるからかんになんしてもらいたい、そなたもながのろうじようでさぞくろうをしたことだろう」と、そこは骨肉のおんあいだがらゆえ御じようあいもかくべつで、わけへだてないおものがたりがござりまして、すぐに織田こうずけの守どのへおあずけなされて、よくいたわつてとらせるようにとの御ごじよう誼でござりました。

いくさの方は二十七にちのあさからやんでおりましたが、おいちどのをわたしたうえはも

はや猶予することはない、しろをひといきにもみつぶして浅井おやこに腹をきらせるばかりだと、のぶなが公おんみずから京極つぶら尾というところへおのぼりになってそうぐんぜいに下知げぢをなされ、ひらぜめにせめおとせとおっしゃいましたので、えい、えい、おう、と、寄せ手はすさまじい鬨とぎのこえをあげて責めにかゝったのでござります。このとき御いんきよ久政公の丸にはぞうへい八百ばかりこもっておりまして、四方の持ちくちをかためておりましたけれども、てきは眼にあまる大軍のうえに、しばた修理しゆりのすけどのがさきにとつて塀に手をかけ、ひたくと乗りこんで来られましたので、ごいんきよもいまはこれまでとおぼしめされ、いのくちえちぜんえちぜんの守どのにしばらく寄せ手をさゝえさせて、そのまに御しようがいなされました。御かいしゃくは福寿庵ふくじゆあんのでござります。鶴松太夫と申す舞のじょうずもおりましたが、いつもお供をおおせつかつておりましたおなさけにこんども御しようばんをさせていたゞきますと申して、おさかずきをいたゞいて、ごさいごをみとゞけてから、ふくじゆ庵どの、介錯をつとめ、じぶんはお座敷よりいちだん下の板じきへさがつて腹をきりましたそうにござります。そのほか井口どの、赤尾与四郎どの、千田うねめのしようどの、脇坂久ざえもんどの、みなさま自害なされました。この御いんきよはおとしをめしていらしたのにお気のどくなてんまつでござりましたけれども、かん

がえてみればすべて御自分がわるいのでござります。こう云うはめにならないうちに、はやく長政公のおことばにしたがわれて朝倉どのをおみかぎりなされたらようござりましたのに、おだどの、御うんせいをみぬく御がなりきもなく、よしないぎりをおたてになつてあえなくおはてになりましたのは、たれをうらむことがござりましょう。そればかりか、かつせんの駈けひき、出陣のしおどきについても、御いんきよらしく引っこんでいらつしやればよいものを、いち／＼出しゃばつて長政公のごけいりやくをじやまなされ、勝つべきいくさにおくれをとつて、みす／＼御運をにがしたこともいくたびだつたでござりましょう。おだどのがてん^天まはじゆん^{魔波旬}のいきおいを持つておられたからとて、ながまさ公のさはいはにおまかせになつていらつたら、これほどのことはござりませなんだ。されば浅井のお家は、一代のすけまさ公、三代のながまさ公、ともにぶそうのめいしやうでいらつしやいましたのに、二代の久政公の御りようけんがたたくなく、御思慮があさかつたばかりにめつぼうをまねきました。それをおもえば長政公こそおいたわしゆうござります。あわよくば信長公にとつてかわりてんがのしおきをなさる御器量をもちながら、おやごのいいつけをおまもりなされて、御じぶんで御じぶんのうんせいをおちゞめなされました。わたくしどもが考えましてさえ歯がゆうて歯がゆうて、あきらめきれないのでござりますも

のを、おくがたのおむねのなかはどれほどでござりましたことか。なれどもそれも御孝心のおふかいせいでもござりましたので、まことにぜひがござりませぬ。

御隠居のまるのおちましたのは二十九にちの午うまのこくごろでござりまして、それから、柴田、木下、前田、佐々の手のものどもが一つになつて御ほんまるへおしよせました。ながまさ公はお手まわりの小姓五ひやくばかりできつてゝられさん／＼にてきをなやましてさつとお引きになりましたので、よせてはくろけむりをたてゝ無二むさんにせめましたけれども、堀へとりつこうとするものを突きおとしはねおとし、てきを一人も丸のなかへ入れませなんだ。それで二十九にちのよるは寄せ手もせめあぐんできゆうそくいたしまして、あくる九月ついたちにまたせめてまいりました。ながまさ公はそのときまで父の御さいごを御存じなく、「下野守どのはどうなされた」と小姓におたずねなされましたところに、「ごいんきよはさくじつ御しようがいでもござります」と申しあげるものがおりましたので、「そうとはゆめにも知らなんだ、それをきくからは此の世になんのみれんがあらう、ちゝうえの巾とむらいがつせんをしていさぎよくおあとを追うばかりだ」と、巳の刻ごろに二ひやくばかりで切つて出られ、むらがるてきをきりふせく一とあしもひかずたゝかわれましたが、柴田木下のぐんぜい稲麻竹葦がとうまちくいと取りかこみ、味方はわずか五六十人になり

ましたので、一文字にかけちらし、御ほんまるへ馳せいろうとなされますうちに、敵は御
 ほんまるをのつとつて中から門をかためてしまいましたので、御門の左わきにある赤尾美
 まさかのかみ
 作守どの、屋形へおのがれになりました、やがてお腹を召されました。御かいしやく
 は浅井日向守。お供をいたしたひと／＼は、日向のかみをはじめとして、なかじま
 しん兵衛、なかじま九郎次郎、きむらたろじろう、木むら与次、浅井おきく、わきざかさ
 すけ、などのかた／＼でござります。ときは信長公のおおせをうけて、なんとかしてな
 がまさ公を生けどりにしようとしたのだそうでござりますけれども、きこゆる剛将がひつ
 しのはたらきのゆえにそんなすきはござりませなんだので、あとから屋形へふみこんでお
 ん首ばかりを戴いたのでござります。
 いけどりと云えば、あさい石見守、赤尾みまさかのかみ、おなじく新兵衛、この三人の
 かた／＼は武運つたなく縄目のはじをおうけになって御前へひきすえられました。その
 ときのぶなが公が、「そのほう共、しゅじん長政にぎやくしんをおこさせ、としごろひご
 ろようも己をくるしめたな」とおつしやりましたので、石見どのは強情な仁でござります
 から、「わたくし主人あさいながまさは織田どの、よような表裏ある大将ではござりませぬ」
 と申しあげますと、のぶなが公かつと御りつぶくあそばされ、「おのれ、ふかくにも生け

どりになるほどの侍として、ものゝひょうりが分るか」と、鑕やりのいしづきで石見どのゝあたまを三度おつきになりました。なれどもひるむけしきもなく、「手足をしぼられているものをちようちやくなされてお腹がいえますか、おん大将のこゝろがけはちがったものでござりますな」とにくまれぐちをたゝかれましたので、ついにお手うちになりました。美作どのはおとなしくしておられましたところが、「その方じやくねんのみぎりより武勇のほまれたかく、おにがみのようにうたわれながらなんとしておくれを取ったるぞ」との仰せに、「とかく老もういたしまして此の通りのしまつでござります」と申され、「いちめいを許して取りたてゝつかわそう」という御ごしやう諛でござりましたけれども、「このうえはなんの望みもござりませぬ」と申されてひたすらおいとまをねがわれました。「しからばせがれの新兵衛を世話してやろう」とかさねて御じようがござりましたときに、美作どの御子息しんべえどのをかえりみられ、「いやゝ、御辞退申した方がよいぞ、殿にだまされてわるびれてはならぬぞ」と申されましたので、からゝとおわらいなされ、「老いぼれめ、己をうたがっているな、そんなに己がうそつきに見えるか」と仰つしやつて、そのちほんとうに新兵衛どのお取りたてになりました。

小谷のおくがたは夫おつとながまさ公御しようがいとおきゝあそばしてから、一とまにとじこも

られたきりにちく御回向をあそばしていらつしやいますと、或る日のぶなが公がお見まいにおいでなされ、「たしかそなたには男の子が一人あつたはずだ、その子がたつしやならわたしが引きとつてよう養育いくをして長政のあとをつがせてやりたいが」と仰つしやるのでござりました。おくがたは最初、兄ぎみのこゝろをはかりかねて、「若わかはどうなりましてたことやら存じませぬ」と申されましたが、「ながまさこそかたきだけれども子どもにもんの罪があろう、わたしには甥おいになるのだからいとおしゆうてたずねるのだ」と仰つしやりますので、さてはそれほどにおもつて下さるのかとだん／＼御あんどあそばされ、これ／＼のところにおりますと、万福丸どのゝかくれがをもらしになりました。それでえちぜんちぜんの国つるがごおりへお使者が立ちまして、木村喜内介きないのすけへ、わかぎみをつれてまいるように仰せつかわされましたけれども、きないのすけは思案をいたし、わかぎみは自分いちぞんを以て斬つてすてましたとおこたえ申しましたところが、その後もさい／＼おつかいがござりまして、兄うえがあゝまで云われるものをなまじかくしては折角のなさけにそむく、わがみも和子わこのぶじな顔をみたいほどに一日もはやくつれてきておくれと、しきりにおくがたがせつかれるものでござりますから、きないのすけもこゝろえがたくおもいながら、とてもありかを知られたうえはと、万福丸どのゝお供をして、九がつ三日にごう

しゆう木之本へまいりました。すると木下藤きちろうどのがむかえに出られて若君をうけとられ、のぶなが公へそのむねを言上いたされますと、「その方その子を討ちはたし、くびを串ざしにしてさらしものにしろ」と仰つしやりますので、さすが藤吉郎どのもとうわくいたされ、「それまでのことは」と云われましたなれども、かえつてお叱りを蒙りまして、よんどころなく御諛のとおりになされました。ながまさ公のお首も、あさくら義景どの、お首といつしよに、肉をさらし取つて朱塗りにあそばされ、よくねんの正月、それを折敷おしきにすえてさんがの大名しゆうへおさかなに出されました。のぶなが公も浅井どの、ためにはたびくあやうい目におあいなされ、よほどおにくしみが深かったのでござりましようけれども、もとはと云えば御じぶんの方がせいしを反古になされたのでござります。せめて妹御のおんなげきをさつしておあげなされたら、えんじやのよしみもあるおかたをあれほどになさらなくてもようござりましたろうに。とりわけにくしんのなさけをかりてお市どのをあざむかれ、がんぜないお子をくしぎしになさるとは、あまりむごたらしいなされかたでござります。されば天正じゆうねんの夏、ほんのう寺においてひごうにおはてなされましたのも、あけちがぎやくしんばかりではなく、おおくのひとのつもるうらみでござりましょう。いんがのほどはおそろしゆうござります。

のちの太閤殿下、きのした藤吉郎どのがりつしんなされましたのも此のころからでござりました。こんどの城ぜめには柴田どのはじめみなく手柄をきそわれましたなれども、なかについて藤吉郎どのはばつぐんの功をおたてなされ、のぶなが公もなゝめならずおよろこびになりまして、小谷のおしりと、あさい郡ごおりと、坂田ごおりのはんぶんと、いぬがみ郡とを所領にくだされ、江北のしゅごとなされました。そのおり藤吉郎どのは、小谷のおしろは小ぜいにてはまもりがたいと仰せられ、わたくしのこきよう長浜へうつられまして、当時あそこは今浜と申しておりますのを、このとき長浜とおあらためになったのでござります。

それはとにかく、ひでよし公が小谷のおくがたに懸けそ想なされましたのはいつごろからでござりましたか。わたくしはおくがたがお城をおたちのきななされましたとき、「いつしよにつれて行ってやりたいが、いったんこゝをおちのびてからたよっておいで」と、有りがたい仰せがござりましたものですから、この身はすでになきものとかくごいたしておりますのがまよいのこゝろをしようじまして、おのりものゝあとからまぎれ出で、かつせんのしゝゆうを見とゞける迄いちにちふつかは町かたにかくれておりましたけれども、またおそばをしとうて上野守どのゝ御陣へあがりましたところ、氣にいりの座頭であるからお

こえが、りがござりましたので、さいわいにきびしいおとがめもござりませんで、ふたゝび御用をつとめておったのでござります。されば秀吉公がおこしなされましたおりにもたび〜お次にひかえておったのでござりますが、はじめて御たいめんのときは、御前へ出られますとはるかにへいふくされまして、「わたくしが藤吉郎にござります」とうやく〜しい御あいさつでござりましたので、おくがたもつゝましやかに御えしやくを返され、せんじんの骨折をおねぎらいなされました。ひでよし公は、「わたくし、このたびさせる軍功もござりませぬのに御褒美としてあさいどのゝ所領をたまわり、もつたいなくも長政公のおんあとをつぎますことは弓矢とつてのめんぼくでござります、たゞこのうえは何事も古きおしおきにしたがつて江北をとりしずめ、亡きおん大将の武ゆうにあやかりとうぞんじます」と申され、「陣中のことゆえさぞ御不じゆうでござりましょう、なんぞお手まわりのしなにも御不足のものはござりませぬか、おこゝろおきのうお申しつけくださりませ」などゝ、それは〜如^{じよさい}在^いのな^いおことばで、おどろくばかりあいそのよいお方でござりました。ことにひめぎみたちにまで何くれと御あいきようを振りまかれ、御きげんをとられました、「お姫^{ひめ}さまがいちばんの姉^{あね}さままでいらつしやいますか、どれ〜、わたくしに抱^だつこなさりませ」と、お茶々どのをひぎの上へおのせなされおぐしをかいておあげ

なされて、「おとしはいくつ、おなまえは」など、おたずねになるのでござりました。お茶々どのははか／＼しい御へんじもなさらずにしぶく抱かれていらつしやいましたが、このひとが父御ていじのしろをせめおとした一方の旗がしらかと、おさなごゝろにもにくおぼしめしましたものか、ふと秀吉公のおをおさしなされ、「そなたは猿に似ているのかえ」とおつしやりましたものですから、ひでよし公もすこし持てあまされまして、「さようでござります、わたくしは猿に似ておりますが、お姫さまはお袋さまにそっくりでいらつしやいますな」と申され、はつ、はつ、はつと、わらいにまぎらされました。その後もおいそがしいなかをぬけめなくおみまいにおいでなされ、何やかやとひめぎみたちにまで御しんもつをなされまして、ひとかたならぬおこゝろぞえでござりましたから、おくがたも、「藤きちろうはたのもしいものじゃ」と仰つしやつて、気をゆるしていらつしやいましたけれども、わたくし、いまからかんがえますのに、お市どのゝ世にたぐい御きりようにはやくも眼をおつけなされ、ひとしれず思いをよせていらつしたのではござりますまいか。もつとも主人のぶなが公のいもうと御ごであらせられ、けらいの身ではおよびもつかぬ高嶺たかねの花でござりましたからまさかそのときにごうとうおつもりもござりますまいが、なにぶん此のみちにかけましたらゆだんのならぬ秀吉公でござります。みぶんのちがいと

申しまして、ういてんぺんは世のつねのこと、とり分けえいこせいすいのはげしいのは戦国のならわしでござります。さればながい月日のうちにいつかは此のおくがたをと、ひそかにのぞみをおかけなされましたやら、なされませなんだやら、えいゆうごうけつこのころのうちは凡夫にはかりかねますけれども、あながちこれはわたくしの邪推ばかりでもないような気がいたします。

そう云えば万福丸どのを討ちはたすように仰せがござりましたとき、ひでよし公のとうわくなされかたは尋常でなかつたと申します。あればかりのわかきみ一人おゆるされになりましたとて何ほどの事がござりましたや、それより浅井どのゝみようせきをおつがせなされ、おんをおきせになりました方がかえつて天下せいひつのもとい、仁あり義あるなされかたかとぞんじますと、さま／＼におとりなしあそばされましたが、おきゝ入れがござりませなんだので、「しからばなにとぞ此のやくを余人におおせつけくださりますよう」と、いつになくさからわれましたところ、のぶなが公はなはだしく御きげんを損ぜられ、「その方こんどの功にほこつてまんしんいたしたか、いらざるかんげんだてをなし、あまつさえわがいつつけをしりぞけて余人にたのめとは何ごとだ」と、きびしくおとがめなされましたものですから、しおくと退出されまして、けつきよく若君を御せいばいなされ

たのだときいております。かれこれおもしろいあわせますのに、ひでよし公はまんぷくまるど
 のを害されて、のち／＼までもおくがたのうらみをお受けなさることがおつらかったので
 ござりましょう。それもなみ／＼のころしかたでなく、くしぎしにしてさらしものにせよ
 との御じようでありましては、なおさらのことでございます。この役まわりがえりにえつ
 て秀吉公にわりあてられましたのは、笑しょうし止と申しましょうか、おきのどくと申ししまし
 うか。こうねん柴田どのとおくがたの取りあいをなされ、こいにはおやぶれになりま
 したけれども、ついに勝家公御夫婦をせめほろぼされ、生々よ／＼のかたきとなられました
 のもこのときからのいんねんでがなござりましょう。

当時わかぎみの御さいごのことはおくがたのお耳へいれぬようにと、のぶなが公のおこ
 ろづかいがござりましたので、たれいちにんも申しあげたものはないはずでござりますけ
 れども、さらしくびにまでなりまして、しよにんのまなこにふれましたことゆえ、うす／
 世せしやう上のとりさたをおき／＼こみになりましたか、またはむしがしらせたと申しますもの
 か、いつからともなくけはいをおさとりあそばしてきつと御しあんなされたらしゆう、そ
 れからは秀吉公がおこしになりますとかえつてみけしきがすぐれぬようでござりました。
 なれども或る日、「えちぜんからはあれきりなんのたよりもないが、若わかはどうしたことか

しらん、とかく夢みがわるいので気になります」と、ひでよし公へおたずねになりましたので、「さあ、いっこうに承知いたしませぬが、いまいちどおつかいをお出しなされましたは」と、さあらぬていで申されますと、「でも、そなたが若をうけとりに行ったというではないか」と仰つしやりましたのが、しずかなうちにもするどいおこえでござりました。こしもと衆のはなしでは、そのときばかりはお顔のいろまでがまっさおにかわつて、ひでよし公をはつたとおねめつけなされたそうにござります。そんなことから秀よし公は御前のしゆびがわるくなりまして、だん／＼遠のかれましたのでござります。

さて信長公はわずかのあいだに数箇国をきりなびけられ、こと／＼くわがりようぶんにくわえられまして、しようしへの御ほうび、こうにんのおしおきなど、それ／＼御さたあそばされ、九がつ九日にはもはや岐阜のおしろにおいて菊の節句をおいあいあそばされました。重陽ちようようのえんはまいねんのござりますけれども、べつしてそのみぎりは大小名がよそおいをこらしてお札にまいられ、ごんごどうだんのぎしきのありさま、めをおどろかすばかりであつたともつばらのうわさでござりました。おくがたはしようとうと申しふれられてしばらく江北におとゞまりなされまして、どなたにもたいめんあそばされず引きこもつておられましたか、おなじ月のおかごろ、いよく尾州びしゅうきよす清洲のおさとかた

へおかえりあそばすことになりました。当時信長公はぎふの稲葉やまを本城になすつていらつしやいましたので、おくがたには閑静なきよすのおしろのほうが御つごうがよかったです。もつとも途中ちくぶしまへさんけいなさりたいと云う仰せでござりましたから、お女中がたやわたくしども、おつきそい申しあげまして、長浜よりお船にめされました。おりふし、伊吹いぶきやまにはもう雪がつもっておりまして、みずうみのうえはひとしおさむうござりましたけれども、さえわたつた朝のこととござりましたので、とおくちかくの山々まではつきり見えたのでござりましょう、お女中がたはみなくふなばたとりついで、ながねんすみなれた土地にわかれを惜しまれ、そらをわたるかりがねのこえ、かもめの羽ばたきにもなみだをながされ、かぜにそよぐあしの葉のおと、なみまにおどる魚のかげにもあわれをもよおされましたこととござります。ふねが竹生ちくぶしまの沖あいへまいりましたとき、「しばらくこゝでとめておくれ」というおことばでござりまして、いちど何事かと不しんにぞんじておりますと、やがて舳へさきに経づくえをおなおしなされ、水のおもてにむかつてたなごゝろを合わされしずかに御ねんじゅあそばされましたのは、おおかたそのあたりのみなぞこにかの石塔がしずめてあったのでござりましょう。さてはちくぶしまへまいりたいと御意ごいなされたのもそういう仔細があたりになつたのかと、そのときわ

れ／＼もおもいあたりましたのでござります。ふねが波のまに／＼ゆられて一つとところにたゞようておりますあいだ、おくがたは香をおたきあそばして南無徳しよう《勝》寺殿天英宗清大居士と、いつしんにおんまなこを閉じられ、あまりながいこと合掌なされていらつしやいますので、もしやこのまゝ、ふなばたよりおん身をひるがえし、おなじみなごこのもくずにおなりあそばすのではないかと、おそばのかた／＼はしんぱいしまして、そつとおめしものゝすそをとらえていたそうでござりますが、わたくしにはたゞ、おくがたのお手のうちで鳴るじゆずのおとがきこえ、たえなる香のかおりがにおつてまいったばかりでござります。

それよりしまへおあがりなされて一と夜参さんろう籠あそばされ、あくる日佐和さわやまへおわたりになりました、いちにちふつか御きゆうそくなされましてから御ほつそくあそばし、どうちゆうつゝがなく清洲きよすのおしろへ御あんちやくになりました。おさとかたではけっこうな御殿をしつらえてお迎え申し、「小谷のおん方」とおよび申しあげて至極たいせつなおとりあつかいでござりましたから、なに御不自由のないおみのうえでござりましたけれども、姫ぎみたちの御せいじんをたのしみにあさゆうかんきん看経をあそばすほかにはこれと申すお仕事もなく、おとなうお方もござりませんので、もうまったくの世すてびとのような佗びし

いおくらしでござりました。それにつけても、いまゝではおおぜいの人目もござりますし、なにやかやとおまぎれになることもござりましたのに、ひねもすうすぐらいお部屋のおくにとじこもつていらしつてしよざいなくおくらしなされましては、みじかい冬の日あしでさえもなか／＼長うござります。しぜんおむねのなかには亡き殿さまのおすがたがおもうかべられ、あゝいうこともあつた、かういうこともあつたと、かえらぬむかしをおしのびなされて悲歎にくれていらつしやいました。いったいおくがたは武門のおうまれでいらつしやいますから、なにごとにも御辛抱づようござりまして、めつたと人にふかくのなみだをおみせになることはござりませなんだが、もはやその頃はおそばの衆と申しましてもわたくしどもばかりでござりましたので、はりつめたおこゝろもいつときにおゆるみなされたのでござりましょう。いまこそほんとうのかなしみにおん身をゆだねられ、ひとけのない奥の間で何をおもい出されましてかしのびねに泣いていらつしやるのが、ふとお廊下を通りますときに耳についたりいたしまして、とかくお袖のしめりがちな日がおおいでござりました。

そういう風にして一とゝせ二たとせはゆめのようにすぎましたなれども、そのあいだ、春は花見、あきはもみじがりのお催しなど、お気ばらしにおすゝめいたしましても、「わた

しはやめます、おまえたちで行つておいで」と仰つしやいまして、御じぶんは浮世のほかのくらしをなされ、たゞひめぎみたちをお相手になされますのがせめてものお心やりと見えまして、御きげんのよいおわらいごえのきかれますのはそんなときばかりでござりました。さいわい三人のお子たちはどなたもおたつしやにおそだちなされ、おんみのたけも日ましにおのびになりまして、いちばんおちいさい小督こくわうのなども最早やおひとりであんよをなされたり、かたことまぜりにものを仰つしやつたりなされましたので、それをごらんあそばすにつけても亡おつとき夫が御ぞんしうであられたならばと、またおんなげきのたねでござりました。べつしておふくろさまとしましては、まんぶく丸どの御さいごのことをお忘れなく、いつまでもおいたみなされていらつしやいしましたが、なにぶん御自分のあさはかさから現在のお子を敵におわたしなされまして、あゝいうおかあいそうなことになつたのでござりますから、だました人もうらめしく、だまされたわが身もくちおしく、なか／＼おあきらめになれなかつたらしゆうござります。それに福田寺へおあずけなされた末の若君もいまはどうしていらつしやるやら。よいあんばいに信長公は此のお子のことを御存知なされませんでしたので、いったんはおのがれになりましたものゝ、乳ちのみ見のおりにおわかれなされましたきりその後の安否ごをおきゝにならないのでござりますから、口に

出しては仰つしやりませんでも、雨につけ風につけ、いちにちとしておあんじあそばさな
いときはなかつたでござりましょう。そんなことから一そうひめぎみたちを世にないもの
におぼしめしまして、ふたりの若君の分までもかあいがつてお上げなされました。

京極さいしろう《宰相》殿高次公は、ちようどそのじぶん十三四さいでいらつしやいまし
たでしようか。のちには信長公の小姓をつとめられましたけれども、お元服まえはきよす
にあずけられていらつしやいまして、とき／＼おくがたの御殿へおこしなされたことが
ござりました。申すまでもござりませぬが、もと此のお児は浅井どの、お家にとつては御
主筋しゆうすじにあたられる江北のおん屋形、佐々木高秀公のおわすれがたみでござります。され
ばがんらいはこのお児こそ近江はんごくのおんあるじでござりますけれども、御先祖高清
入道のとき伊ぶきやまのふもとに御いんたいなされましてから、御りようないは浅井どの、
御威勢になびいてしまひまして、御じぶんたちはほそ／＼とくらしていらつしやいまし
たところ、せんねん小谷らくじようのみぎり、のぶなが公が江北に恩をきせようとの御け
いりやくからわぎ／＼此のお児をおよび出しになりまして、小姓におとりたてなされたの
でござります。こうねん、天正十年のろくがつ惟これとう任ひゆうがのかみのはんぎやくにくみ
して安土あづち万五郎のともがらと長浜のしろをおせめなされ、まつた慶ちよう五年の九月関ヶ

原かつせんのおりには、大坂がたに裏ぎりをなされて大津にろうじょうあそびされ、わず
か三千人をもつて一まん五千の寄せ手をひきうけられましたのは此のお方でござりますが、
まだそのころは、そういう横紙やぶりの御きしようともみえませなんだ。おとしから云え
ばわんぱくざかりの時分でござりましたけれども、貴人のおうまれでありながら幼いとき
よりひか^日げ^陰ものゝようにおそだちなされ、どこかにこゝろぼそそうなあわれな御様子がお
ありになつて、御前へ出られてもおくちかすがすくなく神妙にしていらつしやいましたの
で、わたくしなどには、いらつしやるのかいらつしやらないのか分らないくらいでござり
ました。もつとも此のお児のおふくろさまは長政公のいもうと御^ごでござりましたから、ひ
めぎみたちとはいとこ同士、おくがたは義理の伯母御におなりなされます。それで万づく
丸どのゝことをしのばれるにつけても此のお児をいとしがられました、「わたしが母御の
かわりになつて上げますよ、用のないときはいつでもこゝへあそびにおいで」と仰つしや
つて、なさけをかけてお上げなされ、「あの児はだまつているけれども腹にしつかりした
ところがある、きつと利発ものにちがいない」とおほめになつていらつしやいました。さ
ようでござります、おはつ御料人^{ごりようにん}と御えんぐみをなされましたのは、それよりずつと
ち、七八ねんもさきのごとでござりまして、当時は姫ぎみもおちいそうござりましたから、

そんなおはなしはござりませなんだ。なれども此のお児は、おはつどのよりもお茶々どのに人知れずのぞみをかけておいでなされ、それとなくお顔をぬすみ見にいらしたのではござりませうまいか。もちろんどなたもそう気がついたかたはござりませなんだが、子供のくせに大人のようにおちついていらして、むつつりとおだまりなされ、いつまでゞも御前にかしこまっておいでなされたのは、何かいわくが御ありになったのかとおもわれます。そうでなければ、かくべつおもしろいこともないのしにばゞ御殿へおこしなされて、窮屈なおもいをあそばしながらじつとすわつていらつしやる訳もござりますまい。わたくしだけはなんとなく無気味なようにかんじまして、うすゞ嗅ぎつけておりましたので、

「あのお児はお茶々さまに眼をつけているらしい」と、こしもとしゆうに耳うちをしたことがござりましたけれども、めくらのひがみだと申されましてみなさまがおわらいなされ、まじめにきいて下すつたかたはござりませなんだ。

さあ、おくがたが清洲にいらつしやいましたあいだは、小谷のおしろのおちましたのが天しようがんねんの秋のこと、それよりのぶなが公御逝去のとしの秋ごろまでゞござりますから、あしかけ十年、ざつとまる九ねんの月日になります。まことに光陰は矢のごとしとやら、すぎ去つてみればなるほどそうでござりますけれども、天下のみだれをよそにおな

がめあそばされ、いつどこに合戦があつたとも御存知ないようなひっそりとしたくらしをなされましては、九年というものはずいぶんなごうござります。さればおくがたもいつとはなしに次第にかなしみをおわすれなされ、つれ／＼のおりにはまた琴などのおなぐさみをあそばすようになりました。それにつれましてわたくしも、すきなみちではござりますし、お気散きさんじにもなりますことゆえ、御ほうこうのあいまには唱歌しょうかやしやみせんのかいこをはげみ、わぎをみがきまして、いよく御意にかないますように出精しゅっせいいたしましたことでござります。唱歌と申せば、あの隆達節りゅうたつぶしという小唄のはやり出しはたしかそのころでござりまして、

さてもそなたは

しもかあられか初ゆきか

しめてぬる夜の

きえ／＼となる

など、申すのや、それからまた、

りんきごころに

枕な投げそ

なげそまくらに

とがはよもあらじ

と申すうた、もつとおかしな文句のものでは、

帯をやりたれば

しならしの帯とて

非難をしやる

帯がしならしなら

そなたの肌もしならし

など、よくみなさまにうたつてきかせたことがござります。ちかごろは此のりゆうたつぶしもすたれましたけれども、一時はあれが今の弄齋節ろうさいぶしのように大はやりをいたしました。きせん上下のへだてなくうたわれたものでござります。太閤でんかゞ伏見のおしろでお能を御らんなされましたときは、隆達どのおめしになつて舞台でうたわせられました。幽齋公がそれにあわせて小つゞみをお打ちになりました。わたくしがきよすにおります時分は、よう／＼流行しはじめたころでござりましたから、最初はほんの腰元しゅうの憂さはらしに、扇で拍子をとりながら小ごえでそつとうたいまして、節をおしえて上げたりし

たのでござりますが、お女中がたは今申し上げたおかしな文句のうたがおすきで、あれをうたわせてはころ／＼とおわらいになるものですから、いつしかおくがたのお耳にとまりまして、「わたしにもうたつてきかせておくれ」と仰っしゃるのでござりました。「なか／＼、あなたがたにおきかせ申しますようなものでは」と、御じたい申し上げましても、「ぜひにうたえ」と御意ぎよなされますので、それからたび／＼御前へ出ましてうたつたことがござります。「おもしろの春雨や、花のちらぬほどふれ」と申す、あの文句をたいそうおこのみなされ、あれをいつでも御所望あそばされまして、いったいにうき／＼としたものよりは、しんみりとした、あわれみのふかいものゝ方がおすきのようござりました。よくわたくしがおきかせ申しましたのは、

しぐれも雪も

をり／＼にふる

君故なみだは

いつもこぼるゝ

とか、

おもふとも

そのいろ人に

しらすなよ

おもはぬふりで

わするなよ

というような唄でござります。この二つのうたの文句は何かしらわたくしの胸のおもいにかよいますせい、これをいつしんにうたいますときは、腹のそこより不思議なちからがあふれいで、おのずから節まわしもこまやかになりこえさえ一そうのつやを発しましたので、おきゝになるかたもつねにかんどうあそばされ、又自分でも自分のうたのたくみさきゝほれまして、こゝろの中のわだかまりがいつときに晴れるのでござりました。それになんか、わたくしはしやみせんの曲をかながえまして、文句のあいだにおもしろい合いの手などをくわえて、いちだんと情じょうのふかいものにいたしました。こんなことを申しますと何やら自慢めきますけれども、こういう小唄に三味せんを合わせますのは、わたくしなどのいたずらが始めなのでござりまして、まえにも申しましたように、当時は鼓で拍子をとりますのが普通だったのでござります。

とかくはなしが遊芸のことにわたりますようでござりますが、わたくしいつもかながえま

すのに、うまれつきおんせいがつくしく、唄をきようにうたうことが出来ますものは此のうえもなく仕合わせかとぞんじます。隆達どのも元は堺さかいのくすりあきうどでござりましたのに、うたが上手なればこそ太こう殿下のお召しにもあずかり、ゆうさい公につゞみを打たせていちだいの面目をほどこされました。もつともあのかたはみずから一流をはつめいなされましたほどの名人、それにくらべたらわたくしなどはものゝかずでもござりませぬが、清洲のおしろで十じゅうねん年の春秋はるあきをすごしまするあいだ、あけくれおくがたのおそばをはなれず、月ゆき花のおりにふれて風流のお相手をつとめまして、ひとかたならぬ御恩をこうむりましたのも、いさゝかおんぎよくをたしなみましたがゆえでござります。人の望みはいろ／＼でござりまして、何がいちばんの果報とも申されませぬから、わたくしのようなきようがいをおわれとおぼしめすかたもござりましようなれども、じぶんの身にとり此の十ねんのあいだほどのしいときはござりませなんだ。さればなか／＼隆達どのをうらやましいとおもいませぬ。それを何ゆえかと申しますのに、おくがたのおことにあわせて三味線のひじゆつをつくし、または御しよもうの唄をおきゝに入れて御しんちゆうのうれいをやわらげ、いつも／＼おほめのおことばをいたゞいていたのでござりますから、たいこうでんかのぎよかんにあずかりましたよりもずっとほんもうでござります。こ

れもめしいにうまれましたおかげかとおもえば、このとしになりますまで自分のかたわをくやんだことは一ぺんもござりませぬ。

世のことわざに、蟻のおもいも天までとゞくと申します。はかないめくらほうし盲法師でもちゆうぎは人とかわりませぬから、すこしでも御しんろうが癒いえますように、せい／＼御きげんうるわしゆうおくらしなされますようにと、こゝろをこめておつかえ申し、しんぶつにきがんをかけましたせいか、いや、あながちに、そのせいばかりでもござりますまいが、そのころおくがたはおい／＼にお肥こえあそばされ、いちじはずいぶんやつれていらつしやいましたのに、又いつのまにかむかしのようにみず／＼しゆうおなりなされました。おさとへおかえりになりました当座は、お肩のほねといちばんうえのあばらのあいだに凹みが出来、それがだん／＼ふかくなりまして、おくびのまわりなどしきりの半分ほどにおなりなされ、やせほそられるばかりでござりましたので、りようじを仰せつかりますたびになみだにくれておりましたところ、三年目、四ねんめあたりから、うれしや日に月にわずかずつ肉がおつきなされ、七八ねん目には小谷のころよりもなまめかしゆうつや／＼とおなりなされて、これが五人のお子たちをお産みあそばしたおかたとおもえぬほどでござりました。こしもとしゆうにき／＼ましても、丸顔のおかおがひところほそおもてになら

れましたのに、このころはまた頬のあたりがふつくらしもぶくれにおなりあそばし、それにおくれ毛のひとすじふたすじかゝりました風情ふせいはたとえようもなくあだめいて、おんなでさえもほれ／＼したと申します。お肌のいろがまつしろでいらつしやいましたのはもとより天品でござりますすけれども、ながのとしつき日の眼のとゞかぬおくのまに寝雪ねゆきのようにとじこもっておくらしなされ、すきとおるばかりにおなりあそばして、たそがれどきにくらいところでものおもいにしずんでいらつしやるお顔のいろの白さなど、ぞうつと総毛そうけだつようにおぼえたそうでござります。もつとも物のあやめは、かんのよいめくらははおおよそ手ざわりで分るものでござりまして、わたくしなども、どんなにいろじろでいらつしやいますかはひとのうわさをきくまでもなくしようちいたしておりましたが、おなじ白いと申しましても御身分のあるおかたのしろさは又かくべつでござります。ましておくがたは三十路みそじにちかくおなりあそばし、お年をめすにしたがつていよく御きりようがみずぎわ立たれ、ようがんますくおんうるわしく、つゆもしたるばかりのくろかみ、芙蓉のはなのおんよそおい、そのうえふくよかにお肥えなされたおからだのなよくとじてえん艶なることゝ申したら、やわらかなきぬのおめしものがするくすべりおちるようでござりまして、きめのこまかさなめらかさはお若いときよりまたひとしおでござりました。

それにしてもこれほどのおかたが早くから不縁におなりなされ、つゝむにあまる色香をかくしてあじきないひとりねのゆめをかさねていらつしやるとは、なんとということか。しんざん《深山》の花は野のはなよりもかおりがたかいと申しますが、春はお庭にきて啼くうぐいす、あきは山の端はにかたぶく月のひかりよりほかにうかゞうものゝない玉簾たまだれのおくのおすがたを、もし知るひとがありましたら、ひでよし公ならずとも煩惱のほのおをもやしたことでござりましょうに、とかくよのなかの廻りあわせはこうしたものでござります。そんなぐあい、そのころのおくがたは、花さく春のふたゝびめぐりくるときをお待ちあそばす御様子も見えましたが、やはりむかしのおつらかったこと、くやしかったことを、きれいにお忘れにはならなかつたらしゆうござります。それと申しますのは、わたくし、あんなことはあとにもさきにもたつた一遍でござりますけれども、ある日御りようじをつとめながらお話のお相手をしておりましたとき、何かのはずみで、おもいがけないおことばを伺つたことがあるのでござります。その日は最初れいになく御きげんのていでござりまして、小谷のころのこと、長政公のおんこと、そのほかいろく古いことをおもい出されておきかせ下さいましたついでに、ひとゝせ佐和やまのおしろにおいてのぶなが公とながまさ公と初めて御たいめんなされたおりのおものがたりがござりました。なんでもそれ

はおくがたが御えんぐみなされましてから間もなくのこと、おおかた永らく年中でござり
ましたろう、当時さわやまは浅井どの、御りようぶんでござりましたから、のぶなが公は
みのくによりおこしなされ、ながまさ公はすりはり峠までお出むかえあそばされ、やが
ておしろへ御あんないなされまして、しよたいめんの御あいさつのち、善をつくし美を
つくしたるおもてなしがござりました。さてあくる日は、たゞいま天下の大事をひかえて
あなたこなたと日をついやすもいかゞであるから、今度はそれがしがこのしろをお借り申
し、自分が主人役となつて御へんれいをいたそうと、のぶなが公より仰せいだされ、なが
まさ公と御いんきよとおなじしろにおいておふるまいにおよばれまして、おだどのより
の引出物ひきでものには、一文字宗吉のおん太刀をはじめおびたゞしき金子銀子馬代きんすぎんすうまだいを御けらい
しゆうへまでくだしおかれ、あさいどのよりの御かえしには、おいえ重代じゆうだいの備前かね
みつ、定家卿の藤川にてあそばされました近江名所づくしの歌書、そのほかつきげの駒、
おうみ綿などけつこうなしな／＼をとくのえられ、お供のかた／＼にも御めい／＼へ
あらみの太刀やわきざしをおくられました。またおくがたも久々にておん兄ぎみに御たい
めんのため小谷よりおこしなされましたので、のぶなが公のおんよろこびひとかたならず、
あさいどの、老臣がたを御前へおめしになりました、みな／＼きかれよ、その方どもの主

人びぜんのかみが斯くそれがしの聳になるうえは、にほんこくちゆうは両家の旗になびく
 であろう、さればそのつもりでずいぶん粉骨ふんこつをぬきんでくれたら、きつとおのくを
 大名にとりたて、つかわすぞと仰せられ、ひねもす御しゆえんがござりまして、夜は御き
 ようだい三人にてむつまじくおくのまへおん入りあそばし、ひきつゞいて十日あまりも御
 たいりゆうなされました。そのあいだの御ちそうには、さわ山の浦に大あみをおろしまし
 て、鯉やら、ふなやら、湖水のうおを数しれずとつてさしあげましたところ、これもこと
 〳〵御意にかない、美濃のくにはとても見られぬ名物である故、ぜひかえりにはみ
 やげに持つてゆきたいとおおせられ、いよく御帰じようのまえの日にふたゝびおんなご
 りの御しゆえんなどがござりまして、上々じょうじょうのしゆびにて御ほつそくなされましたの
 こと。「あのときは内大臣どのも徳勝寺とくしょうじ殿さまもほんとうに仲がよきそうににこ
 していらして、わたしもどんなにうれしかったことか」などゝ、そんなおはなしをこま
 〳〵とあそばされまして、「おもえばあの十日ばかりのあいだがわたしのいちばんしあ
 わせなときでした。それにつけても一生のうちにしたのしいおりというものはそうたくさん
 はないものだね」と仰っしゃるのでござりました。さればそのときはおくがたは申すまで
 もなく、御けらいたちも両家が不和になろうなどゝは考えてもみませぬことで、みなく

せんしゆうばんぜいを祝われたのでござりますが、ながまさ公が兼光のおん太刀を引出物になされましたについて、のちに兎や角申すものがありましたそうにござります。それはなぜかと申しますのに、右のおん太刀は御せんぞ亮政公御ひぞうのお打ち物でござりました由にて、いかにたいせつな御しゆうぎのばあいとはいえ、あゝいう重代のたからを他家へつかわされる法はないのに、そういうことをあそばしたのが、あさいのお家の織田どのにほろぼされる前ぜんびよう表ひょうだったのだと申すのでござります。なれども理窟はつけようでござります。長政公がそれほどの品をおゆずりなされましたのも、つまりはおくがたや義理の兄上をなみくならずおぼしめしたからでござりましょう。そのためにお家がほろびたのなんのと、それは世間のなまものしりがたまゝ事のなりゆきを見てそういう風に云いたがるのではござりませうか。わたくしがさように申し上げましたら、

「それはおまえのいう通りです」

と、おくがたもおうなずきあそばして、

「舅となり聳となりながら、ほろぼすのほろぼされるのと、そんなことを気にするほうがまちがっています。内大臣どのにしたところで、そのじぶん敵か味方かわからない土地をお通りなされて、わずかのにんずでみのゝくにははる／＼おこしになるといふのは、

容易のことではなかつたのです。そのこゝろざしにたいしても、徳勝寺殿さまがあれだけのことをしてあげるのは、ひごろの御きしようとしてあたりまえだとおもいます」と仰つしやつて、それからまた仰つしやいますのに、

「でもおおぜいのけらいの中には不こゝろえなものもいました。たしか遠藤喜右衛門尉という者だつたか、あのときわたしたちが小谷へかえると、あとから馬でおいかけて来て、こよい織田どのはかしわばらで御一宿なされます、よいついでゞござりますから討ち果たしておしまいなされませと、わたしには内證で、そつと殿さまにみゝうちをしたことがありました。おろかなことをいう奴だとのさまはお笑いなされて、おとりあげにはならなかつたけれど」

と、そんなおはなしがござりました。

そのみぎり、長政公はすりはり峠までお送りなされ、そこでお別れになりまして、えんどう喜えもんのじょう、あさい縫殿助、なかじま九郎次郎の三人をもつて、柏原までのぶなが公のお供をおさせなされたよしにござります。おだどのはかしわばらへおつきになりまして、常菩提院のおんやどへお入りなされ、こゝはながまさの領分だからすこしも心配はないと仰つしやつて、御馬廻りのさむらいたちを町かたへおあずけになり、お近きんじゆ

習^うの小姓しゅうと当番役のものだけをおそばへお置きなされました。えんどう殿はそのありさまを見てとつて急にひきかえし、馬にむち打ちもろあぶみにて小谷へはせつき、人をとおざけてながまさ公へ申されますようは、それがしつく／＼信長公の御ようだいをうかゞいますのに、ものごとにお気をつけられることは猿^{えんこう}猴のこずえをつたうがごとく、御はつめいなことは鏡にかげのうつるがごとく、すえおそろしいおん大将でござりますゆえとても此のゝち殿さまとの折り合いがうまく行くはずはござりませぬ、こよいのぶなが公はいかにも打ちとけておいでなされ、お宿にはほんの十四五人がつめていただけでござりますから、しよせん今のまにお討ちとりなされるのが上^{じょう}分^{ぶん}別^{べつ}かとぞんじます、いそぎ御決心なされて御にんずをお出しあそばされ、おだどの主従をこと／＼く討ち取つて岐阜へらんにゆうなされましたなら、濃州尾州はさつそくお手にはいります、そのいきおいにて江南の佐々木をおいはらい、都に旗をおあげなされて三好をせいばつあそばされるものならば、てんがを御しはいなされますのはまたゝくうちでござりましょうと、しきりに説かれましたそうでござります。そのときにながまさ公の仰せに、およそ武将となる身にはこゝろえがある、はかりごとをもって討つのはよいが、こちらを信じて来たものをだまし討ちにするのは道でない、のぶながゝ今こゝろをゆるしてわが領内にとゞまっている

のに、そのゆだんにつけ入って攻めほろぼしては、たとい一たんの利を得てもついに天のとがめをこうむる、討とうとおもえば此のあいだじゅう佐和山においても討てたけれども、おれはそんな義理にはずれたことはきらいだと仰っしゃって、どうしてもおもちいになりませなんだので、遠藤どのもそれならいたし方がござりませぬが、あとでかならず後悔あそばされるときがござりますぞと申されて、またかしわばらへおもどりなされ、なにげないで御馳走申しあげまして、あくる日無事にせきがはらまでお見おくりなされましたとやら。おくがたは此のいきさつをくわしくおきかせくださりまして、

「しかし遠藤の云ったことにも、いまかんがえれば尤もなふしがあるようにおもわれる」と、そうおっしゃるのでござりましたが、そのときふいにおこえがふるえて、異様にきこえましたので、なにかわたくしもはつといたしてうろたえておりますと、

「一方がいくら義理をたてゝも、一方がたてゝくれなかつたらなんにもならない。てんがを取るにはちくしようにもおとつたまねをしなければならぬのかしら」

と、ひとりごとのように仰っしゃって、それきりじつといきをこらえていらつしやるではござりませんか。わたくし、これはとおもいまして、お肩をもんでおりました手をやすめて、

「はゞかりながら、おさつし申しあげております」

と、おぼえずへいふくいたしました。するとおくがたはもう何事もなかったように、

「御苦ろうでした」

と仰つしやつて、

「よいからあちらへ行つておくれ」

というおことばでござりますので、いそいでおつきへさがりましたけれども、そのときはやくはなをすゝつていらつしやるおとがふすまをへだてゝきこえたのでござります。それにしてもついさつきまでは御きげんがようござりましたのに、いつのまにかみけしきがおわかりなされ、いまのようなことを仰つしやつたのはどうしたわけか。はじめはたゞ、なつかしいむかしがたりをあそばしていらつしやるうちに、だん／＼お話に身がいりすぎて、おもい出さずともよいことまでおもい出されたのでござりましょうか。はしたない奉公人なぞに御心中をおもらしなされますようなおかたではござりませなんだのに、しゞゆうおむねのおくふかくこらえてばかりおすごしなされましたのが、御自分でもおもいもうけぬときにはからずお口へ出たのかもしれないせぬ。なれども小谷のころのことを十とせにちかい今となつてもおわすれなさらず、これほどつよく根にもつておいでなされ、とりわけお

ん兄のぶなが公へそれまでのおにくしみをかけていらっしやいましたとは。夫をうばわれ子をうばわれた母御のうらみはなるほどこういうものだったかと、わたくしそれをはじめで知りまして、もったいなさとおそろしさとにそのあとしばらくからだのふるえが止まなかつたくらいでござります。

まだこのほかにもきよすにいらしつた時分のことはおもいでばなしがかずく／＼ござりますけれども、あまりくたくしゅうござりますからこれほどにいたしておきまして、それよりのぶなが公のふりよの御さいごをきつかけに、このおくがたがふた／＼び御えんぐみあそばすようになりました始終を申し上げましょう。もつとも信長公御せいきよのことはかくべつ申し上げませいであなたがたはよく御ぞんじでいらっしやいます。あの本のう寺の夜討ちのござりましたのが天正じゅう年みずのえうまどしのろくがつ二日。なにしろかうなへんじが^{変事}出^{しゅつたい}来た^いそうとはたれいちにんもゆめにもおもいつかなんだこととござります。そのうえおん子城介どのまでがおなじく二条の御所においてあけちが兵に取りこめられて御せつぷくあそばされ、御父子いちどに御他界と知れましたときはまったく世の中がわきかえるようなさわぎでござりました。おりふし御次男きたばたけ中将どのは勢州に御座あそばされ、御三男三七どのは丹羽五ろぎえもんどのと御いっしよに泉州堺の津に

おいでなされ、しばた羽柴のかた／＼もそれ／＼とおくへ御出陣でござりまして、あづちのおしろにはお留守居役の蒲生がもう右兵衛大夫どのが手うすのにんずで御台みだいやお女中さまがたをしゅごしておいでなされました。それで侍をはだか馬にのせて御城下へふれあるかせ、「さわぐなく」と取りしずめて廻られましたも、まちかたの者はいまにもあけちが攻めて来ると申して泣くやらわめくやらのうろたえ方でござります。右兵衛だいふどのも最初は安土にろうじょうのかくごでおられましたけれども、こゝではこゝろもとないとおもわれましたか、また急に模様がえになりました、御台やお局さまがたを早々におつれ申し上げて御自分の居城日野谷へたちのかれました。それが三日の卯うの刻だそうで、五日には早や日向守があづちへまいりなんなくおしろを乗つとりまして、けっこうなお道具類やきんぎんのたからがそのまゝになつておりましたのをごり／＼く己れのものになし、家来たちにもわけあたえたと申すうわさでござりました。あづちがそんなふうでござりますから、岐阜でもきよすでも、さあもう今にあけちが寄せて来はせぬかと上を下へのそうどうをいたしておりますと、そのさいちゆうに前田玄以齋どのが岐阜のおしろから城介どの、御台やわかぎみをおつれなされて清洲へにげてこられました。このわかぎみはのぶなが公の御嫡孫にあたらせられる後の中納言どの、当時は三法師どのと申し上げてわずか三つに

おなりなされ、おふくろさまがたといなば山の居城にいらつしやいましたが、あのものたちを岐阜ぎふに置いてはあやういから早くきよすへ逃がすようにと、城介どの御自害のとき玄以齋どのへ御ゆいごんがござりましたので、玄以齋どののはたゞちにみやこをのがれ出てぎふへまいられ、御自分でわかぎみを抱きかゝえて逃げてこられたのでござります。そうするうちにあけちのぐんぜいは佐和やま長浜の諸城をおとしいれて江州をいちえんに切りなびけ、蒲生どのゝたてこもる日野じようへとりつめてまいりました。勢州からは北畠中將どのがそれをすくおうとおぼしめされ近江路へ打って出られましたけれども、途中こゝかしこに一揆がおこつてなかくすゝむどころではござりませんので、一時はまつたくどうなることかとおもつておりますと、やがて三七のぶたか公と五郎ざえもんのじようどのと一手になつて大坂へ馳せのぼられ、ひゆうがのかみの智織田七兵衛どのを討ちとつたと申すしらせがござりました。ひゆうがのかみもそれをきゝますと日野をあけち弥平次にまかせて十日に坂本へ帰陣いたし、十三日にやまぎきのかつせん、十四日にはもはやひでよし公三井でらに着陣あそばされ、ひゆうがのかみの首としがいとをつなぎあわせて粟田口あわたぐちにおいてはりつけになされました。さあそのかちいくさのひようばんが又たいへんでござりました、このかつせんには三七どの、五郎ざえもんの、いけ田きいのかみどのゝめん

くひでよし公とちからをあわせておはたらきでござりましたけれども、なかんづく秀吉公は毛利ぜいとのおつかいをさつそくに埒らちあけ、十一日の朝にはあまがさきへとうちやくあそばされまして、そのかけひきのすみやかなることはまことに鬼神をあざむくばかり。ひゆうがのかみは最初すこしもそれをしらずにやまぎきへじんを取りましたが、のちにひでよし公ちやくじんとときましてあわてゝにんずをたてなおしたと申します。そんなしだいで自然ひでよし公がそうだいしようにおなりなされかようにじんそくにしようぶが決しましたので、にわかには御いせいがりゆうくとして御一門のうちに肩をならべるものもないうようになられました。

きよすのおしろへもおいゝ上かみがた方から知らせがまいりまして、まあともかくもひとあんとみなくよろこんでおられました。そのうちにおんこの大名小名がたがだんくんに駈けつけて来られました。もうその時分、あづちのおしろはあけちの余類が火をつけて焼いてしまいましたし、ぎふにはどなたもいらつしやいませんし、なんと申しても清洲がもとの御本城でござりまして三法師ぎみもいらつしやることとござりますから、まず一往はどなたもこゝへ御あいさつにおこしなされます。わけてもしゆりのすけ勝家公は越中おもてゝほんのう寺の変事をおきゝなされ、かげかつ公と和睦なされていそぎとむら弔いがつせん

のためみやこへ上られますところに、はやくも日向守うちじにのよしを柳ヶ瀬やなにおいて御承知あそばされまして、それよりたゞちにこちらへおいでなされました。そのほか北ばたけのぶかつ公、三七のぶたか公、丹羽五ろざえもんのじょうどの、いけだ紀伊守どの御父子、はちや出羽守どの、筒井じゅんけいどのなど、十六七日ごろまでにみなさま御あつまりでござりまして、ひでよし公も京都において亡君のお骨をひろわれましてから、いったん長浜の御本領へおたちよりあそばして、ほどなくおこしなされました。のぶなが公御在世のみぎりは、きよすより岐阜、ぎふよりあづちと御本城をおすゝめあそばされ、めつたにこちらへおかえりなされますこともござりませず、ながいあいだひっそりいたしておりましたので、かくおれきくの御けらいしゆうがおそろいあそばすのはほんとうにひさしぶりでござりました。それに柴田どのをはじめ先君せんくんと御苦ろうをともになされました旧臣のかた／＼がいまではいずれも一国一じょうのおんあるじ、おおきは数ヶ国だいくみょうの大々名におなりなされ、きらをかざり美々しき行列をしたがえて引きもきらずに御ちやくとう

《着到》なされますので、御城下はきゆうにこんぎついたしまして、しめやかなうちにもたのしい気がいたしたことでござります。

さて御城内におきましては、十八日からひろまにおより合いなされまして御ひょうじょう

がござりましたが、くわしいことは存じませぬけれ共、亡君のおん跡目相続のこと、明^{あきち}地^{けつこく}闕^{けつこく}国の始末についての御だんごう《談合》らしゅうござりました。それが何分にも御めいゝに御りようけんがちがいますことゝて、なかゝとまりがつきませんで、引きつゞき毎日のように夜おそくまでおあつまりなされ、ときにはけんかこうろんにも及ばれましたときいております。まあじゆんとうに申しますれば三法師ぎみが御嫡流でいらつしやいますけれども、御幼少のこととござりますから、いまのばあいは北畠どのおあとへすえようと仰つしやる方々もござりますし、そんなことで何や彼やとむずかしくなったのとござりましょう。しかしけつきよく御家督の儀は三ぼうしぎみにきまりましたものゝ、柴田どのとひでよし公とがはじめから折りあいがあしく、ことゝにあらそわれたようござりました。それと申しますのが、秀吉公はこんどの功劳第一のお方でござりまして、ないゝこゝろをお寄せなさるかたゝがおられますところに、かついえ公はお家の長老でいらつしやいますから、御連枝^{ごれんし}さまをのぞいてはいちばんの上席におつきあそばし、万事につけて列座の衆へ威をふるおうとなされます。ことに御知行^{おちぎよう}わりにつきかついえ公せんだん《専断》をもつて秀よし公へ丹波のくにをおあたえなされ、御じぶんはひでよし公の御本領たる江州長浜六まんごくの地をおとりなされましたのが、双方の意趣をふか

めるもとになったと申します。なれどもこれはまあおもてむきでござりまして、まったくのところは、御兩人ながら小谷のおん方にけそうしておいでなされ、どちらもおくがたをわが手に入れようとあそばしたのが事のおこりかとぞんじます。

これより先にかついえ公は、きよすにおつきなされますとおくがたへお目どおりあそばされましてねんごろな御あいさつでござりましたが、そのうち三七どのへみつゝにおたのみなされましたとみえ、或る日三七どのおくがたの御殿へおこしなされましてかついえ公へ御さいえんの儀をおすゝめなされたらしゅうござります。おくがたも、そこはなんと申しましてもおん兄ぎみにたよつていらつしやいましたことゆえ、御ぞんしようのうちこそおにくしみもござりましたけれども、やはり今となりましてはひとかたならずおなげきあそばし、むかしのうらみもおわすれなされてひたすら御えこうをつとめていらつしやいました折柄、このさき御自分の身はともかくも、三人のひめぎみたちのゆくすえをおもわれますと、だれをちからになされてよいか途方にくれていらつたのでござりましょう。さればかついえ公の浅からぬこゝろをおきゝになりまして、にくからずおぼしめましたか、まあそれほどないまでも、あながちおいやではなかつたらしゅうござりますが、一つには徳勝寺でんさまへみさおをおたてなさりたく、一つには小谷どの、後室こうしつとしておだ家

の臣下へおくだりなされますことゆえ、そのへんのおかんがえもござりまして、さしあたりとこの御ふんべつもつかずにいらつしやいましたところ、ほどなくひでよし公よりもおなじおもいを申しこされたようにござります。もつともそれはどなたが仲だちをなされましたか、おおかた北畠中将どのあたりでござりましたろうか。なに、いたせ北畠どのは三七どのと腹ちがいの御きようだいでいらつしやいまして、どちらも御れんし《連枝》であらせられながらおもしろからぬおん間柄でござりましたから、一方がかついえ公の肩をもたれましたにつけ、一方がひでよし公のしりおしをなされたのもござりましょう。もとよりふかく立ち入ったことはしかと申しあげかねますけれども、お女中がたがよりく／＼にひそく／＼ばなしをなされますのを、わたくし小耳にはさみまして、さてはひでよし公、小谷のときよりれんぼなされていらしたのだ、あの時そうとにらんだことはやつぱり邪推ではなかつたわいと、ひそかにおもいあたりましたことござります。それにしても十年以来、たえずせんぐんぼんぼのあいだを往来あそばし、あしたに一壘をぬきゆうべに一城をほ屠ふられるおはたらきをなされながら、そのおいそがしいさなかにあつてなおおくがたのおんおもかげを慕いつゞけていらしたのでござりましようか。昔をいえば身分の高下もござりましたものゝ、このたびやまざきの一戦に亡君のうらみを晴らされ、あわよく

ば天下をこゝろがけていらしたお方のことでござりますから、いまこそ御執心ごしゅうしんをいろにお出しになりましたものとおもわれます。しかし、ひでよし公はそうとしまして、武強いつぺんのおかたとばかりみえましたかついえ公までがやさしい恋をむねにひそめていらつしやいましたとは、ついわたくしも存じ寄らなんだことでござります。ひよつとしましたら、これはいろこいばかりではなく、三七どのとしばたどのがしめし合わされ、とくよりひでよし公の御心中を見ぬかれまして、わざとじやまだてをなされたのもござりましょうか。まあいくぶんかそういう気味がござりましたかもしれませぬ。

なれどもひでよし公へ御さいえんの儀は、じやまがありましてもありませいでもまとまる道理はござりませなんだ。おくがたはその御そうだんをお受けになりましたとき、「藤きちろうはわたしをめかけまにするつもりか」と仰つしやって、もつてのほかのみけしきでござりましたとやら。なるほど、ひでよし公には朝日どのと申すおかたがまえからいらつしやいますから、そこへおかたづきなされましては、いくら御本妻同様と申してもやはりお妾でござります。それにのぶなが公御他界のゝちとなりましては、小谷のおしろぜめのと きいちばんに大功をあらわして浅井どのゝ御りようぶんを残らずうばい取ったものも藤吉郎、まんぶく丸どのをだまし討ちにして串ぎしにしたものも藤吉郎、一にも二にも、にく

いのは藤きちろうのしわざだと、おん兄ぎみへのうらみをうつしてひでよし公へいしゆをふくんでいらしたかとぞんじます。まして織田家のおん息女たるお方が、ちかごろきゆうに羽ぶりがよいとは申しながら氏うじもすじようもさだかにしれぬ俄にわか分ぶん限げん者しやのおめかけなどに、なんとしてなられましょうや。どうせ一生やもめをおとおしになれぬものなら、ひでよし公よりはかついえ公をとおぼしめすのは御もつともでござります。そういう次第で、まだはつきりと御決心がついたわけではござりませなんだが、うすくそれが御城中へ知れわたったものでござりますから、なおさら御兩人の不和が昂こもじてしまいました。ぜんたいかつかいえ公の方には、御自分が亡君のあだをむくいるべきおん身として、その手がらをよこどりされたそねみがござります。ひでよし公には恋のねたみ、りよう地を取られないこんがござります。されば御列座のせきにおいてもたがいそれを根におもちなされ、一方がこうとおっしゃれば、一方がいやそれはならぬと、眼にかどたてゝあらそわれまして、御れんし御きようだいはじめその余のだいみよう衆までが柴田がたと羽柴がたとにわかれるというありさまでござりました。そんなことから、御ひようじようのさいちゆうに柴田三左えもん勝政どの勝家公をそつとものかげへまねかれまして、いまのまにひでよしを斬っておしまいなされませ、生かしておいてはおためになりませぬときゝやかれまし

たけれども、さすが勝いえ公は、こんにちわれ／＼御幼君をもりたて、まいるべきばあい
に、どうし討ちをしては物わらいのたねになるからと仰っしゃって、おゆるしにならな
つたと申します。それかあらぬか、ひでよし公も御用心あそばされ、夜中しば／＼厠へ
立つて行かれましたところ、丹羽五ろざえものじょうどのお廊下において秀吉公をよび
とめられ、天下にのぞみを持たれますならかついえを斬っておしまいなされと、おなじよ
うなことを申されましたが、何しにかれを敵としようぞと、これも御しよういんなさらな
かつたそうにござります。なれども長居は無用とおぼしめされましたか、御ひょうじよ
うがおわりますと、夜半やはんにきよすをしのんでおたちのきあそばされ、みの／＼に長松をすぎ
てながはまへおかえりなされまして、一旦は無事におさまりましたことこゝろでこゝろムこゝろり升ます。
その、ち三法師ぎみは安土へおうつりなされまして、はせ川丹波守どの、まえだ玄以齋ど
のがお守り申し上げ、御成人のあかつきまで江州において三十万石をお知行ちぎようあそばし、
きよすのおしろには北畠ちゅうじょうどの、岐阜には三七のぶたか公がおすまいあそばす
ことになりまして、大名しゅうもみな／＼かたく誓紙をかわされ御帰国におよばれました
が、おくがたの御さいえんの儀がさだまりましたのはそのとしの秋のすえでござりました。
この御えんだんは三七どの、おとりもちでござりますから、おくがたはきよすより、かつ

いえ公はえちぜんより岐阜のおしろへおこしなされ、かの地において御祝言がござりました、それより御夫婦御同道にて姫ぎみたちをおつれあそばし、ほっこくへおくだりなされました。その前後のことにつきましては、人によつていろ／＼に申し、さま／＼なうわさがござりますけれども、わたくしはそのみぎりお行列のなかくわゝりましてえちぜんへお供いたしましたことゝて、あらましは存じております。当時、ひでよし公がこのお興こ入れのしことをきゝおよばれ、かついえ公をえちぜんへかえさぬと仰つしやつて長浜へ御出陣あそばされ、おとおりを待ちかまえていらつしやると申す取り沙汰がもつぱらでござりましたが、いけだ勝入齋どのゝおあつかいにておもいとまられましたとも、またそんなことは根もない世上の風説であつたとも申します。もつともひでよし公の御名代として御養子羽柴秀勝公ぎふのおしろへおこしなされ、御祝儀を申しのべられまして、このたび父ひでよしこと、さしさわりのため参賀いたしかねますについては、追つて柴田どの御帰国のさい路次においておまち申しあげ、おんよろこびのしるしまでに一こんさしあげたくと、そういう御口上でござりましたので、かついえ公もこゝろよく御承引なされ、ひでよし公の御饗応をおうけあそばすおやくじょうになつておりました。しかるところ急にえちぜんよりお迎えのかた／＼がにんずを引きつれて駆けつけて来られまして、何かもの／＼し

い御そうだんがござりましたが、秀勝公へは使者をもつておことわりにおよばれ、夜中やちゆうにわかには北国おもてへ御ほつそくなされました。さればひでよし公の御けいりやくがござりましたかどうか、わたくしのぞんじておりますところは右のとおりでござります。

それにしても、おくがたはどのようなおこゝろもちで御下向ごげこうなされましたか。とかく再縁となりますと、いくらおりつばな御こんれいでもさびしい気がするものでござります。おくがたも浅井家へおこしいれのみぎりは儀式ばんたんきらびやかなことでござりましたろうが、いまはおとしも三十をおこえなされ、かずくの御くろうをあそばしたすえに、三人の連れ子をとみなわかれて雪ふかき越路こしじへおもむかれるのでござります。それが、またどうしたいんねんか、おみちすじまでが此のまえとおなじえきじ駅路をたどつてせきがはらより江北の地へおはいりなされ、なつかしいおだにこのあたりをおとおりになるではござりませんか。けれどもこのまえはえいろく十一ねん辰どしの春だったそうでござりますが、こんどはそれより十五六ねんのとしつきをすぎ、秋とはいいいながらもう北国はふゆの季節でござります。まして夜中やちゆうにあわたしい御しゆつたつでござりましたから、なんの花やかなこともなく、中にはまた、ひでよし公のぐんぜいが途中でおくがたをいけどりに来るなど、あらぬうわさにまどわされておさわぎになるお女中がたもおられました。のみならず

道中のなんじゆうなことゝ申したら、おりあしくいぶき伊吹おろしがはげしく吹きつけ、すゝむにしたがつてさむさがきびしく、木の本柳ヶ瀬あたりよりみぞれまじりのあめさえふつてまいりけん嶮山路に人馬のいきもこおるばかりでござりまして、ひめぎみたちや上臈がたのおこゝろぼそさはさぞかしとさつせられました。わたくしなども旅にはわけて不自由な身でござりますからつらさはひとしおでござりましたが、しかしそんなことよりは、このさむぞらに山また山をおこえなされて見もしらぬ国へおいであそばすおくがたのさき／＼をおあんじ申し上げ、なにとぞ御夫婦仲がおんむつまじくまいりますように、このたびこそは幾いくひさしく久敷お家もさかえ、共とも白髪しらのすえまでもおそいとげなされますようにと、たゞそればかりをおいのり申しております。なれども、さいわいなことにかついえ公はおもいのほかおやさしいおかたでござりまして、亡君のいもうとごということをおわすれなく御たいせつにあそばされましたし、人の恋路をさまたげてまでおもらいなされたゞけあつて、ずいぶんかあいがつてお上げなされましたので、北の庄のおしろにつかれましたからは、おくがたも日々ひびに打ちとけられ、殿のおなさをしみ／＼うれしゆうおぼしめしていらつしやいました。そういう風でもてはさむくとも御殿のうちはなんとなく春めいたこゝちがいたし、まあこれならば御えんぐみあそばしたかいがあつたと、しも／＼

の者も十年ぶりであれいのみまゆをひらきましたのに、それもほんの束の間でござりまして、もうその年のうちにかつせんがはじまったのでござります。

最初、かついえ公は此の中のことを水にながして仲直りをなさろうとおぼしめされ、御こんれいがござりましてから間もなく、のちの加賀大納言さま利家公、不破の彦三どの、かなもり五郎八どの、ならびに御養子伊賀守どのをお使者になされてかみがたへおつかわしになり、ほうばい同士矛盾におよんでは亡君の御位牌にたいしてももうしわけなくぞんずるゆえ、こんごはじつこんにいたしたいと申されましたので、そのときはひでよし公もたいそうおよろこびあそばされ、それがしとても同様に存じておりましたところ、わざ／＼おつかいにてかたじけのうござります、しゆりのすけどのは信長公の御老臣のことでもござれば、なんで違背いたしましうや、これからは万事おさしずをねがいますと、れいのとおり如不在御あいさつでござりまして、お使者のかた／＼を至極にもてなされておかせしになりました。それで殿さまがたは申すまでもなく、わたくしどもまでも御両家おんわぼくの儀をうかゞいまして、もうこのうえはいやなしんぱいもなくなるであらう、おくがたのおん身にもまぢがいはなかりうと、ほつとむねをなでおろしておりますと、それから一と月とたちませぬうちに、ひでよし公すうまん騎をひきいて江北へ御しゆつじん

なされまして、ながはまじようを遠巻きになされました。なんでもこれには仔細のありましたことらしく、ひでよし公が北の庄のごけいりやくの裏をかゝれたのだと申すおかたもござります。なぜかと申しますなら、ほつこくは冬のあいだは雪がふこうござりまして、ぐんぜいをくり出すことができませぬから、とうぶんは和ぼくのていにとりつくろい、らいねんの春ゆきどけを待つて岐阜の三七どのとしめしあわされ上方へせめのぼるように、御そうだんがとゝのつておつたのだと申すこととござります。まあどちらがどうやらわたくしどもにはわかりませぬが、当時ながはまには御養子いがかみどのがこもつていらつしやいましたのに、ひごろ勝家公にたいしうらみをふくんでおられましたよしにて、たちまち羽柴がたに同心なされ、おしろをあけわたしてしまわれましたので、上方ぜいはうしおのごとくみのゝくにゝらんにゆういたし、岐阜のおしろにせめよせたのでござります。北の庄へもしきりに知らせがまいりまして、櫛の齒をひくような注進でござりますけれども、十一月という極寒の折柄、そとはいちめんののおおゆきでござりまして、かついえ公はまいにちくちおしそうに空をおにらみあそばされ、おのれ、猿めがだましおつたか、この雪でさえなくば、わが武略をもつて卵を石になげるよりもやすく上方ぜいをもみつぶしてくれようものをと、お庭のゆきをさん／＼に蹴ちらして齒がみをなされますので、おく

がたははらくあそばしますし、おそばの者はおそろしさにふるえあがるばかりでござりました。羽柴がたのぐんぜいはそのまに破竹のいきおいをもってみのくをたいはん切りなびけ、岐阜をはだかしろにしましたのがわずか十五六にちのあいだのことでござりまして、三七どのもよぎなく丹羽どのをおたのみなされ降参を申し出られましたところ、なぶん先君の御連枝ごれんしのことでござりますから秀吉公もかんにんあそばされ、しからば御老母をひとじちにいたゞきますと仰つしやつて、おふくろさまを安土のおしろへおうつし申し、かちどきをあげて上方へお引きとりなされました。

そうこうするうちに天正じゅうねんのとしもくれまして正月をむかえましたけれども、ほつくくはまだかんきがはげしく、雪は一向にきえそうもござりませぬし、かついえ公は「小癩な猿めが」と仰つしやるかとおもえば、「にくらしい雪めが」と雪を目のかたきにあそばされ、いらくなされておられますので、初春の御祝儀も型ばかりでござりましてそれらしい気もいたしませなんだ。ひでよし公の方では、この雪のあいだに柴田がたの大申しゆうを御せいばつなさるおぼしめしとみえ、年があらたまりますとふたゝびたいぐんをもつて勢州へ御しんぱつなされまして瀧川左近将しやうげん監けんどのゝ御りようぶんを切り潰され、しきりにかつせんせんのさいちゆうと申すしらせがござりました。さればほつくくも今は

しずかでござりますけれども、雪がきえしだいかみがたぜいとの取り合いになるのは必ひつじ定ようでござりますので、おしろの中はその御用意にいそがしく、みなさまがそわ／＼しておられます。わたくしなどはこんなばあいになんのお役にもたちませぬから、手もちぶさたにしよんぼりとしたして炬ばたにすぐんでおりましたが、それにつけてもあけくれむねをいためますのは、おくがたのことでござります。あゝ、ほんとうに、このありさまではおち／＼殿さまとおものがたりをあそばす暇もないであろう、せつかくおちつかれたのにこのようなことになるのだつたら、きよすにいらした方がよかつたかもしれない、どうか味方が勝つてくれ、ばよいが、またしてもこのおしろがし修羅ゆらのちまたと化して小谷のようなまわりあわせになるのではないかと、そうおもうのはわたくしばかりでなく、お女中がたもよるとさわるとそのはなしでござりまして、いや／＼、それでもまさかうちのとのさまがお負けになることはあるまいから、とりこしくろうはせぬものだなど、たがいになぐさめあつておりましたこととでござります。

すると、ちょうどこのおりからに、ある日きようごく高次公がおくがたをたよつて北の庄へにげていらつしやいました。むかし、きよすにおいでなされたころは御元服まえでござりました、が、いつのまにかおりつばな冠者かじやにおなりなされ、世が世ならばもういまじぶん

はひとかどのおんたいしようでござりますけれども、のぶなが公の御おんにそむいてぎやくぞくこれとう日向守の味方をなされましたばかりに天地もいれぬ大罪人におなりなされ、ひでよし公の御せんぎがきびしく近江のくにをあちらへのがれこちらへのがれしておられましたところ、このたび江北がさわがしくなるにつれていよく身のおきどころがなくなられました、ぎりの伯母御のおそでにすがろうとおぼしめしたのでござりましょう。わずかにひとりふたりの供をつれられて、みのかさにすがたをかくしおおゆきのなかを山ごしに逃げていらつしやいまして、おしろへおつきなされたときは見るかげもなくおやつれなされていらつしたと申すこととでござります。それからおくがたの御前へ出られまして、

「おそれながらおちうど落人の身をかくまつてくださりませ、わたくしのいのちを生かすもころすも伯母うえのおこゝろひとつでござります」と申されましたが、おくがたはその御ようすをつく／＼と御らんあそばし、「そなたはまあ、あさましいことをしてくれました」とおつしやつたきり、しばらくなんのおことばもなく、たゞおんなみだでござりました。しかしそのゝちどういふ風にかついえ公へおとりなしをなされましたか、ほかならぬおくがたのお口ぞえでござりますし、あけちのざんとうとは申しながら、ひでよし公に追われて来たというところに、とのさまもふびんをおかけなされましたか、ではまあゆるしてつ

かわそうと仰つしやりまして、おしろにすまわせておかれしました。たかつぐ公がおはつど
のと内祝言をなされましたのはこのときのござりまして、わたくし、それにつきま
しては、うそかほんとうか、或るお女中からおもしろいはなしをうかゞっております。と
申しますのは、たかつぐ公のおのぞみはやはりお茶々どのでござりましたけれども、お茶
々どのが「浪人ものはいやです」と仰つしやっておきらいなされましたので、不本意な
らおはつどのをもらわれたのだそうでござります。いったいおちやく御料人ごりょうにんはおちい
さいときから気ぐらいのたかいところがありません、ことにはやくよりおふくろさまの
お手一つで成人なされましたせい、なか／＼わがま／＼でいらつしやいましたから、その
ようなこともおつしやつたであろうとおもわれますが、「浪人もの」とあなどられた高次
公はさだめし御むねんでござりましたろう。のちにせきがはらのかつせんのみぎり、かん
とうがたへうらぎりなされましたのも、このときのちじよくをおわすれなく、淀のおんか
たへうらみをふくんでいらつたからではござりますまいか。こんなことも邪推でござり
ましようけれども、もと／＼北の庄へ逃げていらつしやいましたのが、伯母御にたよられ
るといふよりも、きよすのころにおみそめなされたお茶々どのをしたわれて来られたのか
とさつせられます。そうでなければ、若狭の太守武田どには実のいもうと御がかたづい

ていらつしやいましたのに、なにしにえちせんへおいでなされましよう。こちらのおくがたは伯母御と申しても義理のおんあいだから、ことにいまではさいえんのお身のうえと申し、あけちのよるいとして柴田どのをたよられるすじはないのみか、ひとつまちがえばさらしくびにもなりかねませぬ。それをおかして、あのゆきのふるなかをこちらへ逃げていらつしやいましたのは、筒井づゝのむかしこいしく、おちやくゝどのゆえにいのちをまとなされましたか、まあそのへんでござりましたろうが、せつかくそれほどのおのぞみがあだになりましたのは笑しょうし止とどのいたりでござります。さればもとゝおはつどのおのおもらいなさるおぼしめしはござりませなんだのに、ときははずみでそうだったのでござりましようか。もつともこのおりはまだいわずけのおやくそくばかりでござりまして、御しゅうぎと申しましてもほんのうちわのおさかずきだけでござりました。

さわがしいなかにもこんなおよろこびのありましたのが正月のすえか二がつのはじめでござりまして、もうそのころには佐久間げんぼどのがかついえ公のせんぼうとして二まんよきをしたがえられ、のこんのゆきをふみしだいて江北へ打って出られました。ひでよし公は伊勢の御陣よりながはまへはせつけられますと、あくるあさはやく足軽にすがたをかえられ、十人ばかりの古老をめしつれて山の上へおのぼりなされまして、柴田がたのとりで

くくをくわしく御らんになりましたが、あの様子ではとてもたやすくやぶれそうもないぞ、味方もせい／＼しろをけんごにこしらえて気永きながにかゝるよりしかたがないと仰っしゃつて、そなえをきびしくあそばされ、きゆうにはおせめなさりませなんだ。それで双方たいじんのまゝ三月がすぎ、四がつになりましてからいよいよとのさまもやながせ表へ御発向でござりました。もはやほっこくもさくらはながち春のなごりのおしまれる季せつでござりまして、おこしいれのゝちはじめての御しゅつじんでござりましたから、うちあわび、かちぐり、こんぶなど、おくがたはことにこゝろをこめておさかなの御用意をあそばし、御主殿しゅでんにおいてかどでおいわいなされました。かついえ公はごきげんよく御酒ごしゅをまいられ、たゞ一戦にてきをほろぼし藤吉郎めのくびを取って、月のうちにはみやこへのぼつてみせようぞ、かならず吉左右きつそうを待つておられよと仰っしゃつて、それより中門へたちいでられ、おくがたもそこまでおみおくりなされましたが、そのときとのさまが門のほとりに弓杖をついておたちなされ、お馬にめそうとなされますと、お馬がいなくきましたので、おくがたのおかおいろがかわつたと申すこととでござります。なれども、このおり、岐阜においては三七どのがふたゝび上方をきになされて柴田がたに内応あそばし、やまとの筒井じゅんけいどのも日ならずうらぎりをなさる手筈がきまつておりましたそうでご

ざります。それにひでよし公はちりやくこそすぐれておられましたけれども、武勇にかけ
てはかついえ公の方にばつぐんのほまれがござりましたし、わけて織田どの、御家老とし
て大名がたも帰服いたされ、としいえ公はじめ佐久間、原、不破、金森のかた／＼など、
たのもしき弓取りたちをしたがえておられましたことゝて、たれがあれまでのはいぐんに
なろうとおもいましょうや。やながせ、しずがたけのかっせんの始終は三さいの小しょうに児ま
でも知つていることとござりますから、いまさら何を申しましようなれども、かえす／＼
／＼もくちおしゆうござりますのは玄蕃どの、御油断でござります。あのときかついえ公の
ことばをきかれさつそくおひきとりなされまして、そなえをかためていらつしやいました
ら、そのうちには順慶どのも打つて出られます、美濃の味方もうしろをつきます、そうな
つてくればどうなるいくさともわかりませなんだが、御本陣より馬上のおれき／＼を七た
びまでも使者にたてられ、きつとおいさめなされましたのに、叔父上はももうろく碌している
など、申されて一向おきゝいれになりませなんだので、さしもの大軍も臍はら次つしもなく、ずれ
てしまいました。それにしても御本陣とあの砦とりでとのあいだはまわりみちをしましても五六
里、まっすぐにまいればわずか一里でござります。かついえ公はたいそう御りつぶくなさ
れたそうとござりますが、それほどならばなぜ御自分でひとはしりあそばされ、げんばど

のを引つたてゝ来られませなんだか、いつものはげしい御氣しようにも似合わぬことでござります。もうろくと申すほどでなくとも、うつくしいおくがたをおもらいなされてやはいいくらかこゝろがのびていらつしやいましたか。わたくしまでがあまりの無念さに、ついこんなあくたいを申してみたくなるのでござります。

北の庄では卯月うづき廿日にさくま玄蕃どのがてきのとりでを攻めおとされ、なかゞわ瀬兵衛尉どのゝ首を討つたと申すしらせがござりまして、たいそうおよろこびあそばされ、さいさきよしとおぼしめしていらつしやいますと、江北の方ではその夜中やちゆうに美濃路よりつゞく海道すじや峰々山々にたいまつたいまつのひかりがあらわれて廿日の月しろをくらますほどに空をこがし、しだいに万燈会まんとうえのごとくおびたゞしい数になりました、ひでよし公がおおがき大柿より夜どおしでお馬をかえされたらしく、廿一日の暁ぎやうてん天にあたって余吾よごのみずうみのかなたがにわかにながさわがしく相成あいなり、玄蕃どえんぱんのゝ御陣もあやういと申してまいりました。その飛脚のつきましたのが同じ日の末ひつしの刻さがりでござりましたが、そのうちにはや落ち武者がぼつゝ逃げかえつてまいりまして、味方はそうはいぼくにおよび、とのさまも御運のすえらしいと申すことでござりました。おしろではあまりのことにおどろきあきれ、よもやおもつておりますと、日のくれがたに勝家公むぎんのありさまにて御帰城あそばさ

れ、しばた弥右衛門のじょうどの、小島わかさのかみどの、中村文荷斎どの、徳菴どのな
 どをおめしになりまして、玄蕃もりまさがわがいつけをまもらぬばかりに越度おちどを取った
 ぞ、それがし一代のこうみようもむなしくなつたが、これも前世のいんがであらうとおつ
 しゃつて、いまはおかくこのほどもすゞしく、さすがにとりしずめていらつしやいました。
 きけば御子息権六どのはどうなされましたか、らんぐんのちまたのことゝて生死のほども
 お分りにならず、とのさまもすでに柳ヶ瀬の陣中においてうちじになされますところを、
 せめておしろへおかえりになつてしずかに御生害あそばしませ、こゝはわたくしがお引き
 うけいたしますと、毛受勝介どのがたつておすゝめ申しあげましたので、それではと仰つ
 しゃつて五幣のお馬じるしを勝介どのおあずけなされ、府中の利家公のおしろで湯づけ
 をめしあがられました、それよりいそぎ北の庄へ駈け込まれたのでござります。としいえ
 公もお供いたしましたしようと申されて御いつしよにたちいでられましたけれども、しいて御
 辞退なされまして途中からおかえしになりましたが、またしばらくしてよびもどされまし
 て、その方はそれがしとちがい筑前のかみとかね／＼じつこんにしておられる、それが
 しへの誓約はもはやこれまでに果たされているから、以来はちくぜんとわぼくして本領を
 あんどなされたがよい、このほどじゅうの骨おりは勝家うれしくおもいますと仰つしやつ

てこゝろよくお別れになつたと申します。それが廿一日のゆうこくでござりまして、あく
る廿二日には堀久太郎どのをせんじんとしてかみがたせい上方勢がひたくと北の庄へおしよせてま
いり、ひでよし公もやがてとうちやくなされまして愛宕山のうえより諸軍をさしずあそば
され、おしろをすきまもなく取りまかれたのでござります。

このとき御城内においてはどなたもくこれを最期とおもいきわめたかた／＼ばかりで
ござりまして、そんなありさまを見ましてもさわぐけしきもござりませなんだ。かついえ
公はそのまえの晩に御けらいしゆうをおめしになりまして、じぶんはこのしろで寄せ手を
ひきうけいまひとかつせんして腹をきるつもりだから、じぶんといっしよにとゞまるもの
はとゞまるがよいが、おやたちが存命のものもあるうし、妻子を置いて来たものもあるう、
そういうものはすこしもえんりよにおよばぬから早々に在ざいしよ所へ引き取つたがよい、罪な
き人をひとりでもよけいころすことは本意でないと仰っしゃって、いとまを取りたいもの
には取らせ、人質などもそれ／＼ゆるしておやりになりましたので、おしろにのこりま
したにんずはたといわずかでござりましても、みなくいのちよりも名をおもんずるひと
／＼でござります。わけても弥えもんのじょうどの、若狭守どのなど、おれき／＼の衆
は申すもおろかでござりますが、若狭どの、一子新五郎どののは十八歳におなりなされ、や

まいの床にふせておられましたのに、輿こしにかゝれておしろへはせつけられました。「小島若狭守が男新五郎十八歳因病氣柳瀬表出張せざる也、只今籠城いたし、全忠孝」と大手の御門のとびらに書きつけられました。もつとお若いおかたでは佐久間十蔵どの、これは十五歳でござりました。利家公の智でいらつしやいましたので、まだ御幼少のことゝ申し、府中のおしろにはお舅さまがおいでゝすから、しのんであちらへおたちのきななされませ、なにも籠城あそばさずとも苦しかるまいとぞんじますと、御けらいがいさめましたけれど、も、いやゝ、おれは小さいときから引きとられて養育を受けているうえに莫大な領地をたまわっている、その恩義のあるのが一つ、もしとしいえ利家のえんじやでなければ母への孝こ養うように生きながらえるみちもあるが、舅のえんにすがつて一命をつなぐのは卑怯だとおもうことが一つ、みようじをけがせば先祖にたいしてもうしわけのないのが一つ、この三つの道理に依つてろうじようするのだと申されて、討死のかくごをきめられました。また御ご定番じようばんの松浦九兵衛尉ほつけどのは法華の信者でござりまして、小庵しょうあんをむすんで上人しやうにんをひとり住まわせておかれまして、その上人もまつうらどのがろうじようなさるのをきかれまして、あなたと愚僧とは現世げんせのちぎりがふこうござりましたから、ぜひ来世へもおともをして報恩謝徳ほうおんしゃとくいたしましようにと申され、まつうらどのとめるのもきかずに

おしろへたてこもられました。それから玄久と申すおひと、これは豆腐屋でござりました。もつとも以前はかついえ公のおさな馴染なじみでござりましたが、あるときかつせんにふかでもを負いましたについて、このからだでは御奉公もなりかねますからおいとまをいたゞきまず、もうわたくしも武士をやめて町人になりますと申されましたので、「そうか、それならお前は豆腐屋になれ」と仰つしやつて、大豆を年に百俵ずつ下されました。さればこんどもおともをいたし、来世でおとうふをさしあげるのだと申して、わざ／＼まちかたよりおしろへはいつたのでござります。そのほか舞の若太夫、山口一露齋、右筆ゆうひつの上坂大炊助どの、このかた／＼ものこられました。なかにはみれんなものもおりまして、徳菴とくぼうどのは柴田どの、法師武者の一人ひとりといわれ、文荷齋どのおなじように世に知られた方かたでござりましたのに、としいえ公のひとじちをぬすみ出されておしろをにげのび、府中へたよつて行かれましたけれども、不義理な奴だと仰つしやつてとしいえ公もみけしきをそんぜられ、おちかづけにならなかつたと申します。そのうちこのかたはどうなりましたやら。せけんの人ひとがだれもあいてにしませぬので、たいそうおちぶれて都のまちをさまよつておられた姿を見たものがあるとも申します。そうかとおもえば、村上六左えものじょうどのは、経かたびらを着ておしろにこもつておられましたところ、とのさまのおん姉末森殿

ならびに御息女をおつれ申してたちのくようにとの御^{ごじよう}誼がござりまして、余人に仰せつ
 けくださりませと申されましても、いや／＼、これはその方にたのむ、それが却つて忠義
 であるぞと仰つしやりますので、よんどころなくおふたかたのおともをいたして竹田の里
 へ逃げられましたか、二十四日のさるの刻に天守にけぶりのあがるのを見られて、おふた
 かたと御いっしよに自害しておはてなされました。まあわたくしのおぼえておりますのは
 これくらいでござりますが、このかた／＼はそのころもつばらもてはやしたことでござ
 りますから、さだめし旦那さまも御存じでいらつしやいましょう。いずれも／＼、かんば
 しい名をのちの世にまでのこされました奇特なひとたちでござります。

あゝ、わたくしでござりますか。わたくしなどはおりつばなかつ／＼の真似は出来ませ
 ぬけれども、せんねんおだにのろうじようのおりに捨てるいのちを生きのびておりました
 ので、いまさらこのよにおもいのこすこともないとぞんじておしろにとゞまつておりましたものゝ、しようじきを申せば、まだおくがたがどうあそばすともわかりませぬので、そ
 の^{御先途}ごせんとをみるとゞけてからともかくもなろうとおもつておりました。かう申しますとひ
 き^怯しようのようでござりますが、おくがたはこちらへ御えんづきなされましてからまるいち
 ねんにもなりませぬ。おだにのときは六ねんのおんちぎりでござりましたのに、それでも

お子たちに引かされてながまさ公とおしきわかれをあそばしたのでござりますから、このたびとてもそうならぬとは限りませぬ。それにしても殿さまからそんなおはなしはないものか。かたきの人質をさえゆるしておやりになりながら、御夫婦と申してもみじかい御えんでござりましたのに、だいおんのある先君のいもうと御と姪御とを死出のみちづれになさるおつもりか。それともまた、いとしいおくがたをひでよし公には意地でもわたされぬとおぼしめしていらつしやるのか。かついえ公ともあろうおかたが此の期ごになつてめゝしいこともなさるまいから、いまに何とか仰つしやるだろうが。と、そんなふうにかんがえましたのも、じぶんがたすかりたいというころではござりませなんだが、いきるものぬるもおくがたしだいのいのちときめておりましたのでござります。

寄せ手は廿二日のあさ一番どりの啼くころよりおい／＼取りつめてまいりましたが、御城下の町々、かいどうすじの在々所々を焼きたてましたので、おびたゞしいけぶりが空にま／＼といたしまして日のひかりもくらく相成、おしろから四方をながめますと、いちえんに霧のうみのようで何も見えなんだと申します。上方ぜいはこのくらやみをさいわいに、こえをしのばせものおとをころして、おもい／＼に竹たば、たゞみ、板戸などを持ちまして、そうつとちかづいてまいつたらしく、そのうちにそとがすこしあかるくなりましたら、

さながら蟻のはいよるがごとくお堀のきわへひたと取りついておりました。城内からはきりに鉄炮を打ちましてそのへんのできをみなごろしにいたしました。あらてのぐんぜいが入れ代り／＼おしよせてまいりますのをひつしにふせぎましたことゝて、なか／＼けんにごに持ちこたえまして、この様子では左右そなくやぶられそうもござりませなんだ。そんなぐあいでの日はどちらも手負い死人を出しまして引きとりましたところ、あくる廿三日のあかつき、寄せ手の陣がきゆうに攻めつゞみのおとをひかえてひつそりいたしましたので、何かとおもっておりますと、お堀のむこうに五六騎の武者があらわれまして、「御子息しばた権六どの、ならびにさくまげんばどのを昨夜いけどりにいたしました、おいたわしい儀でござる」とだにおんに呼ばわりましたので、おしろではそれをきくとひとしくみなさまがちからをおとされ、そのゝちはたゞ申しわけに御門をかためておりますばかりで、てつぼうなどもはか／＼しくは打ちませなんだ。わたくし、じつは、そのうちにひでよし公よりなんとかお使いがありはせぬか、おくがたのことをいまもおもっていらつしやるなら、きつと、きつと、どなたかお人がみえそうなものだがと、ない／＼それにのぞみをつないでおりましたことと、ござりますが、あんのごとくそのときになつておあつかい
がござりました。お使者にたゞれましたのはなんと申されるおかたでしたか、お名まえま

ではわすれましたけれども、お武家ではなくてさる上人がおこしなされたとおぼえております。それでそのおかたの御口上には、ちくぜんのかみこと、昨年以来よぎないしあわせで柴田どのとかっせんにおよび、さいわい武運にめぐまれてこゝまでおしよせてまいりましたが、むかしをおもえば総見院さまにおつかえ申した朋輩のあいだがらゆえ、御一命までを申しうけようとは存じませぬ。しゆりのすけどのにおかせられても、しょうはいは弓矢とる身の常、なにごともまわりあわせとおぼしめされてきょうまでのいしゆを水にながされ、このしろをあけわたして高野山のふもとへたちのいてくださらぬか。そうすれば三万石のりょうぶんをさしあげて一生御扶持おんふち申しようかと仰つしやるのでござりました。

なれどもこれはひでよし公の御ほんしんでござりましたかどうか。ちくぜんどのはお市御ごりょう料をいけどりにしたくてそろゝおくの手を出しおつたと、味方はもとより敵の陣中でさえそんなひょうばんが立つたくらいでござりまして、此のおあつかいをまじめにきくものはござりませなんだ。ましてとのさまは、おれにこうさんしろなどはぶれないなことを申すやつだと、上人にむかつて烈つか火のごとくいきどおられまして、勝つも負けるも時の運であるのは申すまでもないこと、それをおのれらにおしえられようか、世が世ならば猿面かんじやめをあべこべに追いつめて腹をきらせてくれようものを、さくまげんばがおれ

の云いつけを守らなんだために賤しずヶ岳ヶにおいておくれをとり、猿奴しずにてがらをえさせたのは無念である、たゞこのうえは天守に火をかけて自害をするから、最後の様子をのちの世の手に見ておくがよい、もつとも城には十余年来たくわえておいた玉たまぐすり薬がある、これが燃えたらおびたゞしい死人を出すだろうから、寄せ手はもつと陣をとおくへ引いていろ、おれはむやくのせつしようをしたくないからそう云うのだ、かえつたらひでよしにきつとそのむねをつたえておけとおっしゃつて、さつさと座を立つてしまわれましたので、お使者もとりつくしまがなくて逃げだされたのでござりました。わたくしそれをきゝましたときは、たった一つのたのみのつなも切れましたことゝて、うらめしいやらなさけないやらでござりましたけれども、こうなつてはむざんやおくがたのおいのちもないにきまつた、この上は三途さんずの川のおともをしてすえながくおそばにおいていたゞくとしよう、どうか来世はめあきにうまれておうつくしいおすがたをおがめるようになりたいものだ、自分にとつてはそれこそ真如しんじゆの月のかげだと、そういうふうにかんね観念んのほぞをかためましたら、それが何よりのぜん善智智識識になりまして、死ぬ方がかえつてたのしいくらいにおもわれて来たのでござりました。

とのさまも、かくなりはてたのはなんともくちおしいしだけけれども、いまさらとこう

云うにもおよばぬ、しよせんこよいはこゝろよくさけをくみかわして、あすの夜あけにはしのゝめの雲ともろともにきえて行こうとおっしゃってそれ／＼御用意をあそばされ、天守をはじめ要所々々へ枯れ草を山のごとくにつみかさねていざといえば火をつけるように手はずをとゝのえられまして、さてあるだけの名酒の樽をのこらず持つてまいれとの御ご誼じょうでござりました。そんなしたくをいたしますうちにはや暮れがたになりましたが、てきの陣屋も城中のかくごのほどを見てとりましたか、おい／＼かこみをゆるめまして、はるかうしろの方へひきましたので、あれ、あのように寄せ手のかゞり火が遠くなつたぞ、さすがにひでよしはおれのこゝろを知っているなど、世にもすぐしげにおっしゃいましたのが、いつものおこえのようではなくて、とうとくきこえましたこととでござります。御しゆえんがはじまりましたのは宵の酉とりのこくごろでござりましたらうか。とのさまがたは申すまでもなく、樽やぐら々々へも樽をおくばりなされまして、おさかなには出来るかぎりのぜいをつくせとお料理方かたへお仰せつけられ、けっこうな珍味のかず／＼をそえられましたので、あちらでもこちらでもおもい／＼のさかもりになりましたが、わけてもじょうちゆうのひろまにおいては、上段の間のしきがわのうえにとのさまが御座なされまして、おくがたがそれにおならびあそばされ、そのつぎにひめぎみたち、一段ひくいおざしきに文荷さ

いどの、若狭守どの、弥右衛門尉どのなどおれきくのしゆうがおひかえなされ、まずとのさまよりおくがたへおさかずきでござりました。奥向きのものもみなくまいれとの有りがたいおことばがござりましたので、こしもと衆やわたくしどもまでも御しようばんにあずかりましておそぼちかくにかしこまっておりましたが、どなたもくこよいが最後でござりますから、とのさまをはじめお侍衆はいろとり／＼の鎧よろいひたれ、太刀、物具ものぐに派手をきそつていぎをたゞされ、お女中がたもきようをかぎりにわれおとらじと晴れの衣裳をおつけになりまして、中にもおくがたは、紅べに、おしろい、かみのあぶらなどひとしおこいめにおたしなみあそぼし、しろたえのおんはだえにしらあ白あ綾やのおん小袖をめされ、厚板あついたのきんみがきのおん帯に、きんぎん五しきの浮き模様のあるからおりの襦うしかけ襦かけをおひきなされていらしたと申します。とのさまはおさかずきを一順おまわしになりますと、「だまってさけばかりのんでおつては気がめいるぞ、明日あすは浮世にひまをあける身があまりじめくしてしていると寄せ手の奴ばらにわらわれる。これから夜どおし風流のあそびをして敵のじんやおどろかしてやりたいものだ」と仰せられましたところに、はやくも遠くのやぐらの方で、ぼん、ぼん、ぼんとつゞみのおとがひゞきまして、

生きてよも

明日まで人のつらからじ

このゆふぐれを訪へかしな

君を千里において

今も酒を飲み

われと心をなぐさむる

と、たれやら舞をまうらしく、ほがらかなうたいがきこえてまいりましたので、それ、あ
のものたちに先を越されたぞ、こちらでもあれに負けるなど仰つしやつて、「人間五十年、
下天のうちをくらぶれば」と御じぶんがまつさきに敦盛をおうたいなされました。この
うたはむかし総見院さまがたいそうおこのみあそばされ、ことに桶狭間かつせんのおり
にはおんみずからこれをおうたいなされ今川どのをお討ちとりになりましたよしにて、織
田家にとつてはめでたいものでござりましたけれども、「にんげん五じふねん、げてんの
うちをくらぶれば、夢まぼろしのごとくなり、一度生を得て滅せぬものゝあるべきか」と、
ろう／＼たるおこえでいまとのさまがおうたいなさるのをきゝますと、そゞろに先君御在
世のころのおんことがしのばれ、さだめなき世のうつりかわりになみだがもよおされまし
て、なみいる勇士のかた／＼もよろいのそでをしぼられたことと、ござりました。

それより文荷齋どの、一露齋どのが一番ずつおうたいなされ、また若太夫どの、まいなどがござりましたが、そのほかにもなか／＼おたしなみのふかいおかたがいらつしやいまして、おさかずきのかずのかさなるにつれ、みな／＼この世のまいおさめうたいおさめにたつしやな芸を御披露におよばれ、遊興のかぎりをつくされますので、御酒宴の席は夜がふけるほどにぎやかに相成、いつ果てることかわかりませなんだ。そのうちに一人、「梨花一枝雨を帯びたるよそほひの、雨を帯びたるよそほひの」と、一座のかた／＼がおもわず鳴りをしずめますような美音をはりあげてうたわれましたのは、朝露軒と申される法師武者でござりました。このおかたはなにごとにも器用でおいでなされ、琵琶、三味線などもみごとにおひきなされますところから、わたくしもかねてじつこんにねがつておりましたので、ふしまわしのたしかなことはとくよりぞんじておりましたなれども、いまの楊貴妃のうたの文句に耳をかたむけておりますと、「雨を帯びたるよそほひの、太液の芙蓉のくれなる、未央の柳のみどりも、これにはいかでまさるべき、げにや六宮の粉黛の、顔色のなきもことわりや、顔色のなきもことわりや」と、そうおうたいなされるではござりませんか。もとより朝露軒どのはそんなおつもりではござりますまいけれども、きいておりますわたくしの身には、おくがたの御きりようをうたっておられるよう

にしか受け取れませぬので、あゝ、それほどにおうつくしい花のかんばせも、こよいをかぎりごに散っておしまいなさるのかと、この期になつていまだに未練がきざしてくるのでござりました。すると朝露軒どのは、「あれ、あれにおる座頭はしやみせんを弾きまするぞ、おくがたのおゆるしをいたゞいて、あれにいちばんうたわせてごらんなされ」と申されましたので、「弥市、えんりよすることはないぞ」とすぐとのさまのおこえがゞりがござりました。さればわたくしとてもいまは何をか御辞退いたしましたよう、これこそ自分ののぞむところと、さつそく三味線を手にとりまして、「君ゆゑなみだはいつもこぼるゝ」とれいの小歌をうたいました。「いや、いつもながら巧者なものだな、ではそれがしも弾いてみよう」と申されて、つぎには朝露軒どのがそのしやみせんをおとりなされ、

滋賀の浦とて

しほはないが

顔の

ゑくぼは

十五夜の月

と、うたわれますので、わたくしそれをきゝながら、さてもおもしろい文句だわいと存じ

まして、みゝをすましておりますと、ところ／＼にながし合いの手がはいります。朝露軒どのはそのところをいとねいろもうるわしくおひきなされましたが、ふと気がつきましたのは、その三味せんのうち二度もくりかえしてふしぎな手がまじっているのをござりました。さようでござります、これはわたくしども、座頭の三味線ひきのもののみなよくぞんじておりますことでござりますが、すべてしやみせんには一つの糸に十六のつぼがござりまして、三つの糸にいたしますなら都合四十八ござります。されば初心のかた／＼がけいこをなされますときはその四十八のつぼに「いろは」の四十八文字をあてゝしるしをつけ、こゝろおぼえに書きとめておかれますので、このみちへおはいりなされた方はどなたも御存知でござりますけれども、とりわけめくら法師どもは、文字が見えませぬかわりには、このしるしをそらでおぼえております、「い」と申せば「い」のおと、「ろ」と申せば「ろ」のおとをすぐにおもい浮かべますので、座頭同士がめあきの前で内證ばなしをいたしますときには、しやみせんをひきながらその音おんをもって互のおもいをおよわせるものでござります。ところでいまの不思議な合いの手をきいておりますと、

ほおびがあるぞ

おくがたをおすくいもおすてだてはないか

と、そういうふういきこえるのでござります。これはごろのまよいではないか、何しにいまごろそんなことを申されるかたがあるものか、よしやそら耳でないにしてからが、たま〜音の組み合わせがしぜんとなつていゝるまでだと、いくたびもおもいかえしておりますうちに、又もや朝露軒どのは、

いかにせん

わがかよひ路の

関守は

関もゆるさず

なかく〜に

と、うたわれるのでござりましたが、これは三味線もまえとはすつかりちがつておりながら、やはりあの手だけがあいま〜へ挟んであるのでござります。あゝ、さては朝露軒どのは敵方のまわしものか、でなくばちかごろ急に内通なされたのか、いずれにしてもひでよし公のおおせをふくんでおくがたをてきにわたそうとしておられるのだな、おもわぬときにおもわぬたすけがあらわれたものだが、ひでよし公がまだおあきらめにならなんだとは、なんたるつよい恋だったのかと、にわかにはむねをとゞろかしておりますと、「さあ、

弥市、いま一曲その方に所望だ」と申されて、ふたゝびしやみせんをわたくしの前へ置かれました。それにしてもこのようなめくら法師をさほどたよりになされるのはなにゆえか。おくがたのためとあらば火のなか水のなかをも辞せぬこゝろのおくを、はずかしくも朝露軒どのにいつか見やぶられておりましたことか。もつともわたくし、眼は見えずともお女中がたの中におりますたつたひとりのおとこでござります。それにかずゝのお座敷というお座敷、わたり廊下のすみ／＼までも、眼あきよりよく勝手をそらんじておりまして、まさかの時はね鼠ずみより自由にはしれます。おもえばくちよろろけん《朝露軒》どのはよくも見込んでくだされしよな、あるにかいなきいのちをながらえていたというもの。こういうお役にたてたいからだ、このうえはおくがたをおすくい申す手だてをつくして、かなわぬときはおなじけぶりときえるばかりだと、とつさにしあんをさだめまして、前後のわきまえもなく三味せんを取り上げ、

見せばや

君に

知らせばや

こゝろの中と

袖の色を

どうたいながら、わななくゆびさきに糸をおさえて、

けぶりをあいづに

てんしゆのしたえおこしなされませ

と、こちら合いの手にことよせまして、「いろは」の音をもっておこたえ申したのでござります。もちろんいちぎのかた／＼はたゞわたくしのうたといと／＼にき／＼ほれてばかりおいでなされ、ふたりのあいだにこんなことばがかわされたとは知るよしもござりませなんだが、そのときわたくしはおくがたをおすくい申すについて、一つのけいりやくをおもいついたのでござりました。と申しますのは、こよいとのおさま御夫婦は天守の五重へおのぼりなされてこゝろしずかに御自害あそばし、それより用意の枯れ草へ火をつける手はずになっておりました。されば御自害をあそばすまえに、ころあいをうかゞって火をつけまして、そのさわぎにまぎれて朝露軒どのゝ一味をひきいれましたなら、にんずをもつておふたかたのあいだをへだてることも出来るであろうと、かようにかんがえました次第でござります。

さても／＼わたくしは、めしいのうえにせいらい至っておくびようでござりまして、かり

にもひとさまをあざむくことはよいいたしませなんだが、てきがたの間かんじゃ者にかたかたんをいたしておしるに火をかけ、あまつさえおくがたをぬすみ出そうとくわだてましたとは、われながらおそろしいこゝろでござりましたけれども、これもひとえにおいのちをおたすけ申したい、ちねんゆえでござりますから、つまるところは忠義になるのだとりようけんをきめておりました。そうこういたしますうちに、みなさまおなごりはつきませぬけれども、はつなつの夜のあけやすく、はや遠とおでら寺のかねがひゞいてまいりお庭の方にほとゝぎすのなくねがきこえましたので、おくがたは料紙りょうしをとりよせられまして、

さらぬだにうちぬる程も夏の夜の

わかれをさそふほとゝぎすかな

と、一首の和歌をあそばされ、つゞいてとのさまも、

夏の夜の夢路はかなきあとの名を

くもるにあげよやまほとゝぎす

とあそばされまして、文荷さいどのがそれを一同へ御披露におよばれ、「それがしも一首つかまつります」と申されて、

ちぎりあれやすゞしき道に伴ひて

のちの世までも仕へつかへむ

とよまれましたのは、ときに取つて風流のきわみと存ぜられました。それよりいづれも詰め所へおひきとりなされ切腹のおしたくでござりまして、お女中がたやわたくしはおふたかたにおつきせい申し上げ、いよく天守へまいりましたこととござります。もつともわれくは四重までお供を仰せつかり、五重へは姫ぎみたちと文荷斎どのばかりをおつれになりましたが、わたくしはいまがだいじのときとぞんじ、五重へかようはしごの中途までそつとあがつてまいりまして、いきをこらしておりましたことゝて、うえの御様子はもれなくうかゞつていたのでござります。とのさまは先ず、

「文荷、そのへんをすつかりあけてくれ」

と仰つしやつて、四方のまどをのこらずあけさせられました、

「あゝ、この風はこゝちよいことだな」

と、あさかぜの吹きとおすおぎしきに端坐あそばされ、

「うちわのものでいまいちど別れの酒を酌もうではないか」

と、文荷さいどのおしやくをおたのみなされまして、おくがたやひめぎみたちとあらためておさかずきがござりました。さてそれがすみましたところで、

「お市どの」

と、お呼びなされ、

「きようまでのだん／＼のこゝろづくしはたいへんうれしくおもいます。こういうことになるのだったら、去年のあきにそなたと祝言をするのではなかったが、いまそれをいい出してませんか。ついてはそれがし、いずこまでも夫婦いっしょにとおもいきわめていたけれども、しかしつく／＼かんがえてみるのに、そなたはそうけんいんさまの妹御であらせられるし、そのうえこゝにいるひめたちは故備前守のわすれがたみのことでもあるから、やはりこれは助ける方が道だとおもう。武士たるものが死んで行くのにおんなこどもを連れるにはおよばぬことだ。こゝでそなたをころしたら、かついえはいったん得意地にかられて義理にんじようをわすれたと、世間のものは云うかも知れぬ。な、この道理をきゝわけてそなたはしろを出てくれぬか。あまり不意のようだけれども、これはよく／＼ふんべつをしたうえのことだ」

と、おもいがけないおことはでござりまして、そう仰つしやるおむねの中はさだめしはらわたもちぎれるほどでござりましたろうけれども、おこえにすこしのくもりさえなく、よどまず云いきられましたのは、さすが剛氣のおん大将でござります。わたくしもそれをきゝ

ましては、あゝ、もつたいないことだ、なさけを知るのがまことの武士とはよく云つたものだ、これほどのおかたとも存ぜずにない／＼おうらみ申していたのは、じぶんこそ下司げすのこんじようだったと、ありがたなみだにかきくれまして、おぼえずおこえのする方を両手をあわせておがみましたが、そのときおくがたは、

「きようというきようになつて、あまりなことをおつしやいます」

と、云いもおわらず泣きふしておしまいなされ、

「総見院そうけんいんどの御存生のころでさえ、いったん他家へとつぎました身を織田家のものだとおもつたことはござりませぬ。ましてたよるべき兄弟もないこんにちになりまして、おまえさまに捨てられましたら、どこへゆくところがござりましょう。死ぬべきおりに死なゝいと死ぬにもまさるはずかしめをうけますことは、わたくしもしみ／＼おぼえがござります。さればさくねんこしいれをいたしましたときから、こんどばかりはどういうことがござりましょうとも、二度とおわかれ申すまいとかくごをいたしておりました。はかない御縁でござりましたけれども、夫婦として死なしていたゞけますなら、百年つれそうのも一生、半としつれそうのも一生でござりますものを、出て行けとはうらめしいおことばでござります。どうかこればかりはおゆるしを」

と、そうおつしやるのが、おんかおにお袖をあてゝいらつしやるらしゆう、ときれ〜に、たえてはつゞいてもれてまいるのでござります。

「しかし、そなた、この三人のひめたちをふびんとは思わぬのか。これらが死ねばあさいの血すじはたえてしまうが、それでは故備前守に義理がたゝないではないか」
と、おしかえして仰つしやいますと、

「浅井のことをさほどにおぼしめしてくださいますか」
と仰つしやつて、いつそうはげしくお泣きなされ、

「わたくしはお供をさせていたゞきますが、そのおこゝろぎしにあまえ、せめてこの見たちをたすけてやつて、父の菩提をとぶらわせ、またわたくしのなきあとをもとぶらわせて下さいまし」

と仰つしやるのでござりましたが、こんどはお茶々どのが、

「いえ、いえ、おかあさま、わたくしもお供をさせていたゞきます」

と仰つしやいましたので、お初どのも小督こくどのも、おなじように「わたくしも〜」と右と左からおふくろさまにおすがりなされ、およつたりがいちどにこみあげてお泣きなされました。おもえばむかし小谷のときはみなさま御幼少でござりまして、なにごと夢中で

いらつしやいましたなれども、いまは末の小ごうどのでさえもはや十をおこえあそばしておいでゝすから、こうなりましてはなだめようもすかしようもござりませなんだ。さればずいぶん御辛抱づよいおくがたまかあいゝかた／＼のおんなみだにさそわれてたゞおろ／＼と泣かれますばかりで、わたくし、じつに、十年このかたこんなに取りみだされましたのはついぞ存じませなんだことござります。それにしましてもおい／＼時刻がうつりますことゝて、どうおさまりがつくだろうかとおもっておりますと、文荷さいどのがひざをおすゝめなされまして、

「おひいさまがた、御末練でござりますぞ」

と叱るように申されておふくろさまとお子たちのあいだへ割つてはいられ、

「さ、さ、それではおかあさまのおかくごがにぶります」

と、むりに引きはなそうとなされるのでござりました。わたくしはこのありさまをうかゞうにつけ、まだとのさまはなんとも仰つしやいませぬけれども、もはやゆうよしてはおられぬところだとぞんじ、はしごの下につんでありました枯れくさの束たばをひきぬきましてそれへともしびの灯をうつしました。おりから四重のおへやではこしもとしゆうが死にしようぞくをあそばされいっせいにねんぶつとなえていらつしやいまして、どなたもきがつ

いたかたはござりませなんだので、それをさいわいにこゝかしこの枯れくきの山へ火をつ
 けてまわり、障子、ふすまのきらいなくもえがらを投げちらしまして、われからけぶりに
 むせびながら、「火事でござります、火事でござります」とさけびごえをあげました。く
 さがじゆうぶんにかわきゝつておりましたところへ、五重の窓がすっかりあいておりまし
 たことゝて風が下より筒ぬけに吹きあげまして、ぱちくゝとものゝ干割ひわれるおとがすさま
 じく、逃げ場にまよわれるお女中がたのうなりごえと悲鳴とがびゆうくゝという火炎かえんのい
 ぶきといつしよにきこえ出しましたが、「やゝゝとのさまのお座所があやういぞ」「御用
 心めさらい、うらぎりものがおりまする」とけぶりの下よりくちゝに呼ばわつてあま
 たのにんずが駈けあがつて来られました。それからさきは、朝露軒どのゝ一味とそれを防
 がれるかたゝとがほのおの中に入りみだれ、たがいにあらそつてせまいはしごを五重
 へのぼろうとなさるらしく、そのこんぎつにもまれましたあちらへこづかれこちらへこづ
 かれいたしますうちに、熱いかぜがさあつとよえんを吹きかけてはまたさあつと吹きかけ
 てまいり、しだいにいきが出来ないようにになりましたので、おなじ死ぬならおくがたと一
 つほのおに焼かれないと、しようねつじごくのくるしみの底にもひっしにおもいきわめま
 して、はしごへ手をかけたときでござりました。「弥市、このお方を下へおつれ申せ」と、

どなたかはぞんじませぬけれども、そう仰つしやつていきなりわたくしの肩の上へじようろ上騰とうさまをおのせになりました。「おひいさま、おひいさま、おふくろさまはどうあそばしました」と、とつきにわたくしはそう申しましたが、それというのはそのとき背中へおんぶいたしましたのはお茶々どのだということがすぐにはわかつたからでござります。「おひいさま、おひいさま」と、つゞけてお呼び申ししても、お茶々どのはうずまくけぶりに気をうしなつていらつしやいまして、なんとも御へんじがござりませなんだが、それにしてもいまのお侍は、なぜ御自分がひめぎみをおたすけ申さずに、めくらのわたくしへおあずけなされましたことか。おおかたそのお侍は忠義一途にとのさまのおあとをしたい、此処を御じぶんの死に場所とさだめておられたのでござりましようか。さすればわたくしとても、おくがたの御せんとをみとゞけずに逃げるといふ法はないと、そうおもいましたことでもござりますけれども、でもこのお児をおたすけ申さなんだら、さぞやおふくろさまがおうらみあそばすことであろう、弥市、おまえはわたしのたいせつなむすめをどこへ捨て、来たのですと、あの世でおとがめをこうむつたら申しわけのみちがない、こうして背中へおのせ申すようになったのはよくくのえんというものだからと、そんなふうにもかんがえられましたし、それに、わたくし、ほんとうはそんなことよりも、せなかのうえに

ぐつたりともたれていらつしやるおちやくどのゝおんいしき警へ両手をまわしてしつかり
 とお抱き申しあげました刹那、そのおからだのなまめかしいぐあいがお若いころのおくが
 たにあまりにも似ていらつしやいますので、なんともふしぎななつかしいこゝちがいたし
 たのでござります。まごゝくしていれば焼け死ぬというかきゆうの場合でござりますのに、
 どうしてそのようなかんがえをおこしましたやら、まことに人はひよんなときにひよんな
 りようけんになりますもので、申すもおはずかしい、もつたいないことながら、あゝ、そ
 うだった、自分がおしろへ御奉公にあがってはじめておりようじを仰せつかったころには、
 お手でもおみあしでも、とんと此のとおりに張りきっていらしつたが、なんぼうおうつく
 しいおくがたでもやはり知らぬまにおとしをめしていらしつたのだと、ふつとそうきがつ
 きましたら、たのしかつたおだにの時分のおもいでが糸をくるようにあとからゝ浮かん
 でまいるのでござりました。いや、そればかりか、お茶々どのゝやさしい重みを背中にか
 んじておりますと、なんだか自分までが十年まえの若さにもどつたようにおもわれまして、
 あさましいことではござりますけれども、このおひいさまにおつかえ申すことが出来たら、
 おくがたのおそばにいるのもおなじではないかと、にわかにな此の世にみれんがわいて来た
 のでござります。こうおはなし申しますと、たいへん長いことぐずゝいたしておりまし

たようでござりますが、そのじつほんのわずかのあいだにこれだけのしあんをめぐらしたのでござりまして、そうと決心がつくよりはやくもうわたくしはけぶりのなかをくゞりぬけ、「おひいさまをおぶつておりますぞ、道をあけて下さりませ」とだいおんによばわりながら、そこはめいじでござりますからなんのえんりよえしやくもなく人々のあたまをはねのけふみこえて、無二むさんにはしごを駈けおりたのでござります。

しかし逃げたのはわたくしばかりではござりませなんだ。おおぜいのものが火の粉をあびてぞろぞろつながつてはしりますので、わたくしもそれといっしょになつて、うしろからえい／＼押されながらかけ出しましたが、お堀の橋をこえましたとたん、がら、がら、がらと、おそろしいひゞきがいたしましたのは、うたがいもなくてんしゆの五重がくずれおちるおとでござりました。「あれは天守がおちたんですな」と、だれにきくともなく申しましたら、「そうだ、空に火ばしらが立っている、きつと玉ぐすりに火がついたのだ」と、そばをはしっている人がそう申されるのです。「おくがたやほかのひめぎみたちはどうあそばしたでござりましょう」とたずねますと、「ひめぎみたちはみんな御無事だが、おくがたは惜しいことをしてしまった」と申されるではござりませんか。くわしいわけはあとで知れたのでござりますけれども、その人とならんではしりながらだん／＼話をき、

ますと、朝露軒どのはまつききに五重へ上つて行かれましたところ文荷さいどのがたちま
ちたくみを見ぬかれまして、「裏ぎり者、何しに来た」というまもあらせず斬つてすてら
れ、はしごのてつぺんからけおとされたと申します。それで一味のかた／＼も気せいを
くじかれましたうえにおい／＼味方の御家らしいゆうが馳せつけてこられましたので、な
かく／＼おくがたをうばい取るなどのだんではなく、かえつてきりふせられましたやけ死ん
だものがおおいとのござりました。そのおり三人のひめぎみたちはなおもおふくろ
さまにしがみついていらつしやいましたのを、ぶんかさいどのが早く／＼とせきたてられ
まして、「このかた／＼をおすくい申し敵のじんやへとゞけたものは何よりの忠義であ
るぞ」と、むらがるにんずの中へつきはなすようになされましたので、いあわせたものが
おひとかたずつお抱き申しあげて逃げたのだそうで、「だからとのさまとおくがたとはいあ
の火の中でじがいなすつたことだろう、おれはそこまではみとゞけなかつたが」と、そう
申されるのでござります。「ではほかのひめぎみたちはどこにいらつしやるのです」と申
しましたら、「おれたちの仲間が背中に負つてひとあしききにこゝを通過つて行つたはずだ。
お前のせおっているおひいさまはいちばん強情で、しまいまでおくがたの袖をつかんで
なされなかつたのをむりやりに抱きあげて誰かの背中へのせたようだったが、その男はま

たお前にわたしして自分は火の中へとびこんでしまった。なか／＼かんしんな奴だったが、あれはおれたちの仲間ではなかったらしい」と申されるのです。いったい「おれたちの仲間」というのはなんのことかとおもいましたら、かみがた上方ぜいがおくがたをうけとるために天守のちかくへしのびよって、ちよろけんどのゝあいずを待つておりましたのだそうで、いま此のところをこんなにぞろ／＼逃げてゆくのは、みんな裏ぎりの一味の者かそうでなければ上方ぜいのひと／＼ばかりなのでござりました。「しかしちくぜんのかみどのはせつかくいくさにお勝ちになつても、めぎすおくがたに死なれてしまつてはなんにもなるまい。朝露軒どのもあんなしくじりをやったのだから御前のしゅびがよいはずはない。どうせ生きてはいられなかつたよ」と、そのおかたはそう申されて、「それでもお前がこのおひいさまをおつれ申しているうえはいくらかめんぼくが立つわけだから、おれはおまえにくつついてゆくつもりだ」と、そんなことを云い／＼手をひかんばんかりになされますので、もうさつきからだいぶんつかれてはおりましたけれども、あえぎ／＼いっしよけんめいにはしつておりますと、よいあんばいに敵がたの足軽大将がお乗りものをもつておむかえにまいられます、とりあえずそれへひめぎみをうつされ、

「座頭、おまえがおつれ申して来たのか」

と申されますから、

「さようでございます」

と申して、いちぶしゞゆうをしようじきにおはなしましたところ、

「よし、よし、それならお乗りものについてまいれ」

と申されますので、かずくのじんやのあいだを通りまして御本陣へお供いたしました。お茶々どのはもう御気分もおよろしいようでござりましたけれども、しばらく御きゆうそくあそばされお手当てをおうけになつていらつしやいますと、たゞちにひでよし公が御たいめんの儀を仰せ出だされ、ほかのひめぎみたちと御いっしょにお座所へおよびいれなされました。それはまあよいといたしまして、わたくしまでがおめしにあずかりましたので、おざしきのそとのいたじきにかしこまってへいふくいたしますと、

「おゝ、坊主、おれのこえをおぼえているか」

と、いきなりおことばがかゝりました。

「おそれながらよく存じております」

とおこたえ申し上げますと、「そうか、まことに久しぶりであったな」と仰つしやつて、

「その方めしいの身といたしてきょうのはたらきは神妙であるぞ。とうぎのほうびになん

なりとつかわしたいが、のぞみがあるなら申してみろ」

と、おもいのほかの上首尾じょうしゆびでござりますから、わたくしはさながらゆめのこゝちがいたし、

「おぼしめしのほどはかたじけのうござりますけれども、ながねん御恩にあずかりましたおくがたにおわかれ申し、おめく〜にげてまいりました罰あたり奴がなんで御ほうびをいたゞけましょう。それよりけさの御さいごのことをかんがえますと、むねがいつぱいござります。たゞこのうえのおねがいは、いま〜でどおりふびんをおかけくださりまして、おひいさまがたに御奉公をつとめさせていたゞけますなら、有りがたいしあわせにぞんじます」

と申しましたら、

「尤ものねがいだ、き〜とゞけてつかわす」

と、さつそくおゆるしがござりまして、

「小谷どのはおきのどくなことをしてしまつたが、こゝにござるひめぎみたちはこれからそれがしが母御にかわつておせわをいたそう。しかしいずれもずんと大きゆうなられたものだな。むかしそれがしの膝のうえに抱かれていたずらをなされたのは、たしかお茶々ど

のだったとおもうが」

と、そうおっしゃって御きげんよくおわらいなされるのでござりました。

こういうわけでさいわいわたくしは路頭にもまよわず、ひきつゞき御奉公をいたすことになりましたけれども、じつを申せば、わたくしの一生はもう此のとき、天しようじゅういちねん卯月^{うづき}二十四日と申すおくがたの御さいごの日におわってしまったのでござりまして、おだにや清洲でくらししましたようなたのしい月日はそのうちいぞめぐつてもまいりませなんだ。それと申しますのは、てんしゆに火をつけ裏ぎり者のでびきをいたしましたことを姫ぎみたちもおきゝなされましたとみえて、しだいにおにくしみがかゝりまして、なんとなくよそゝしくあそばすようにおなりなされ、とりわけお茶々どのなどは、「この座頭ゆえにおしからぬいのちをたすけられて、おやのかたきの手にわたされた」と、ときにはわたくしへきこえよがしにおっしゃいますので、おそばにつかえておりましても針のむしろにすわるおもいがいたしまして、このくらいならなぜあのおりに死なゝかったかと、たゞもうなさけなく、とりつくしまのない身のうえをかこつようになつたのでござりません。もとよりこれも自分が悪事をしでかした罰でござりまして、たれをうらむべきすじもないのでござりますが、いったん死におくれましてはいまさらお跡をしとうたところでおくが

たにあわせる顔もござりませぬから、諸人のつまはじきを受けながら生き耻じをさらしておりますうちに、もみりようじも、琴のおあいても、余人に仰せつけられまして、もうわたくしにはとんと御用がないようになってしまいました。ひめぎみたちはその時分安土あつちのおしろに引きとられていらつしやいまして、ひでよし公のおことばがござりましたばかりにいや／＼ながらわたくしを召しつかつておられましたので、それを知りましてはむりにお慈悲にすぎりますこともこゝろぐるしく、もはや辛抱もいたしかねまして、或る日、こつそりと、おいとまごいの御あいさつもいたさずに逃げるようにおしろをぬけて、どこも申すあてもなくさすらい出たのでござります。

さあ、それがわたくしの三十二のとしてござりました。もつともそのおり都へのぼりまして太閤でんかにおめどおりをねがい、ことの次第を申し上げましたら、一生くうにこまらぬほどのお扶持はいたゞけたでござりましようけれども、このまゝつみのむくいを受けて世にうずもれてしまおうとおもいきわめまして、それよりきようまで宿場々々をわたりあるいて旦那さまがたの足こしをもみ、またはふつゝかな芸をもつて旅のつれ／＼をおなぐさめ申し、三十余年のうつりかわりをよそにながめてくらしながら、いんがなことにはまだ死にきれずにおりますようなわけでござります。そういえばお茶々どのは、あのととき

はあれほど太閤でんかをおうらみあそばされ、「おやのかたき」とまでおっしやつていら
 つしやいましたのに、まもなくそのかたきにおん身をおまかせなされ、淀のおしろに住ま
 われるようになりましたが、わたくしは北の庄のおしろが落ちました日から、いずれそう
 なるだろうとおもつていたことでござりました。あのみぎり、ひでよし公はお市どのをう
 ばいそこねてたいそう御気色みけしきをそんぜられたそうでござりますけれども、わたくしが御前
 へ出ましたときは案に相違いたしましたしもしもそのような御様子がなかつたばかりか、
 かえつてあり難いおことばをさえいたゞきましたのは、お茶々どのを御らんなされまして
 きゆうにおぼしめしがかわつたのでござります。つまりわたくしがほのおの中なかでかんじま
 したのとおなじことをおかんがえなされましたので、えいゆうごうけつごうけつのこゝろのうちも
 けつきよくは凡夫とちがわぬものなのでござりましょう。たゞわたくしはいったんのあや
 まちから一生おそばにおられぬような境涯におちましたけれども、太閤でんかはあのお方
 の父御ていごをほろぼし、母御をころし、御兄弟をさえ串ざしになされたおん身をもつて、いつ
 しかあのお方をわがものにあそばされ、親より子にわたる二代の恋を、おだにのむかしか
 ら胸にひそめていらしたおもいを、とう／＼お遂げなされました。いったいひでよし公
 はどういふ前世のいんねんでござりましたか、のぶなが公のおん血すじのかた／＼をお

したいなされまして、まだこのほかにも蒲生がもうひだのかみどの、おくがたにのぞみをかけていらしたと申します。このおかたは総見院そうけんいんさまのおんむすめ御でいらっしやいまして、小谷どのには姪御におなりなされ、やはりお顔だちが似ていらしたと申しますから、おおかたそれゆえでござりましたろうか。わたくし、人づてにうかゞいましたのには、せんねん飛騨守どのがおかくれなされましたとき、殿下より御後室さまへお使いがござりまして、おぼしめしをつたえられましたけれども、御後室さまは一向おきゝいれがなく、かえつておなげきあそばしておぐしをおろされましたので、蒲生どの、お家が宇都宮へおくにがえになりましたのは、そんなことから御前のしゅびをわるくなされたせいでと申します。それはとにかく、あのお茶々どのがおとしを召すにしたがつてふんべつがおつきなされまして、でんかの御いせいになびかれまされたのは、まったく時代ときよじせつとは申しながら、御自分さまのおためにもけつこうなことでござりました。さればわたくしも、淀のおん方と申されるのはあさいどの、一の姫ぎみだときゝましたときは、どんなにうれしゅうござりましたことか。おふくろさまがあのようにいつも御苦労をなされましたかわりに、えいがの春がこのお子にめぐつて来たのだ、どうか此のおかたゞけはおふくろさまのような目におあいなさらぬようと、たといわが身はあるにかいなき世すぎをいたしておりましたも、

こゝろは始終おそばにはべつておりますつもりで、そのことばかりおいのり申しておりますところ、そのうちにわかぎみ御誕生と申すうわさがござりましたので、もうこれでゆくすえまでも御運は万々歳であらうと、あन्दのむねをなでゝいたのでござりました。それが、旦那さまも御承知のとおり、けいちよう三ねんの秋に太たいこうでんかゞおかくれなされ、ほどなくせきがはらのかっせんがござりましてから、またもや世の中がだんゝかわつてまいりまして、いちにちゝと悲運におなりなされましたのは、なんとということござりましょう。やつぱりおやのかたきのところへ御えんぐみあそばされましたのが、亡きお袋さまのおぼしめしにそむき、不孝のばちをおうけなされたのでござりましたか。おふくろさまもお子さまも、二代ながらおなじようにお城をまくらに御生害なされましたも、おもえばふしぎなめぐりあわせでござります。

あゝ、わたくしも、あの大坂の御陣ごしんのときまで御奉公をいたしておりましたら、お役にはたちませぬまでも、おだにのおしろでおふくろさまをおなぐさめ申しましたように何やかやと御きげんをとりむすび、こんどこそ冥土へおともをいたしておくがたへお詫びを申すことも出来ましたでござりするように、あのときばかりはつく／＼我が身のふしあわせがうらめしく、まいにちゝてつぼうのおとをきゝながらやきもきいたしておりました。

それにつけても片桐いち《市》^正のかみどのはあのしろぜめに関とう方の味方をなされ、ひ
でより公と淀のおん方の御座所へむかつて大砲を打ちこまれましたのは、なんといなさ
れかたか。あのお方は、むかし志津ヶ岳のいくさに七本槍のひとりとうたわれ、その時分
からおとりたてにあずかつたのでござりまして、ひでよし公にはなみくならぬ御恩をう
けていらつしやるはずでござります。世間のうわさでは、太こうでんかゞ御りんじゅうの
みぎりにはあのお方をおんまくらべにおよびなされて、秀頼のことをたのんだぞよと、く
れ／＼も御ゆいごんあそばされたと申すではござりませぬか。われ／＼のようになんげ
んでもそれほど人にたのまれましたら義をたてとおすことぐらいはこゝろえておりますの
に、あのおかたは、たかい声では申されませぬが、権現さまの御いせいにへつらつてとよ^豊
とみ家^臣のだいおんをおわすれなされ、おもてに忠義をよそおいながらかんとうがたに内通
されていらしたのでござります。いえ、いえ、それは、どなたがなんと申されましよう
とも、そうにちがいござりませぬ。理くつはつけようでござりますから、いちのかみどの、
御苦心をおほめになるかたもござりましようが、かりにも敵がたの大砲の役をひきうけら
れて、あろうことかあるまいことか、お主のわかぎみと北の方のいらつしやるどころへ玉
をうちこむようなおかたが、なんで忠臣でござりましようぞ。うき世をすためくらあん

まにもそのくらいなことはわかります。それゆえあのときはいちのかみどのがにくく、憎
く、眼さえみえたら、陣中へしのびこんで一と太刀なりとおうらみ申したいとおもつ
たほどでござりました。

にくいと申せば、せきがはらのときに大津でうらぎりをなされました京極さいしようどの、
仕打ちなども、はらが立つてなりませなんだ。あのおかたはお初御料人（ごりようじん）と内祝言をあそ
ばしながら、かみがたぜいの攻めよせるまえに北の庄をお逃げなされて、若狭の武田家へ
たよつていらつしやいましたところ、そのたけだのもほろぼされてからは三界にす
む家もなく、木の根くさの根にもこゝろをおいてあちこちさまよつていらつしやいました
のが、よう／＼のことでお詫びがなつて大名衆のれつにくわえていたゞけたのは、どな
たのおかげだとおぼしめます。もとの武田どの、おくがたが松の丸どのと申されていら
つしやいましたから、そのおかたのおとりなしもござりましたろうけれども、何よりも淀
のおんかたにつながる御えんがあつたればこそではござりませぬか。いちどは小谷どの、
お袖にすがられ、つきにはそのお子さまのなさけにたよられ、二度までもあやういゝのち
をたすけておもらいなされながら、あの大雪のなかを落ちていらした当時のことをおわ
すれなされ、だいじのせとぎわにむほんをなされて大坂ぜいのあしなみをみだされるとは。

あゝ、あゝ、しかし、いまさらそんなことを申したところで仕方がござりませぬ。かぞえ
たてればくやしいことやうらしいことはいくらでもござりますけれども、さいしやうど
のも、いちのかみどのも、もはやあの世へおいでなされ、権現さまさえ御他界あそばされ
ましたこんにちとなりましては、なにごとともすぎにしころの夢でござります。おもえばノ
ゝおりつばなかつゝがみなくゝおかくれなされましたのに、わたくしはこのさきいつ
まで老いさらばえておりますこととござりましょう。げんき《元龜》てんしやう《天正》
の昔よりずいぶんながい世間をわたつてまいりましたので、もう後生をねがうよりほかの
ことはござりませぬが、たゞこのはなしをいつぺんどなたかにきいていたゞきたかつたの
でござります。はい、はい、なんでござります。おくがたのおこえがいまでも耳にのこつ
ているかと仰つしやいますか。それはもう申すまでもないこと。何かの折におつしやいま
したおことばのふしゝ、またはお琴をあそばしながらおうたいなされましたしょうが唱歌のお
こえなど、はれやかなうちにもえんなるうるおいをお持ちなされて、うぐいすの甲かんだかい
張りのあるねいろと、鳩のほろゝと啼くふくみごえとを一つにしたようなたえなるおん
せいでいらつしやいましたが、お茶々どのもそれにそっくりのおこえをなされ、おそばの
ものがいつもきゝちがえたくらいでござりました。さればわたくしには太閤殿下がどんな

に淀のおん方を御ちようあいあそばされましたかよくわかるのでござります。太こうでんかのおえらいことはどなたも御ぞんじでござりますが、そういうふかいおむねのなかを早くよりおさつし申しておりましたのは、はゞかりながらわたくしだけでござります。あゝ、わたくしも、あれほどのおかたの御心中を知っていたかとおもえば、かたじけなくも右大臣ひでより公のおん母君、淀のおんかたをこの背中へおのせ申したことがあるかとおもえば、なんの、なんの、この世にみれんがござりましょう。いゝえ、旦那さま、もうじゆうぶんでござります。ついゝたゞきすごしまして、つまらぬ老いのくりごとをながゝとおきかせいたしました。家いえには女房もおりますけれども、おんな子供にもこうまでくわしくはなしたことはござりませぬ。どうぞ、どうぞ、こういうあわれなめくら法師がおりますたことを書きとめて下さいまして、のちの世の語りぐさにしていたゞけましたらありがとうござります。さあ、もうおおさめ下さりませ。あまり更ふけませぬうちにすしお腰をもませていたゞきます。

おわり

奥書

○右盲目物語一卷後人作為の如くなれども尤も其の由来なきに非ず三位中将忠吉卿御代清洲朝日村柿屋喜左衛門祖父物語一名朝日物語に云う「太閤ト柴田修理ト取合ハ其比威勢アラソイトモ云又信長公ノ御妹才市御料人ノイハレトモ申ナリ淀殿ノ御母儀ナリ近江ノ国浅井カ妻ナリケル云々天下一ノ美人ノキコヘアリケレバ太閤御望ヲカケラレシニ柴田岐阜ヘ参リ三七殿ト心ヲ合セオイチ御料ヲムカエ取オノレカ妻トス太閤コノヨシ聞召柴田ヲ越前ヘ歸スマシトテ江州長浜ヘ出陣云々」又いう「柴田北ノ庄ヘコモラレケレバ太閤僧ヲ使トシイニシヘノ傍輩ナリ一命ヲ助ヘシ云々是ハスカシテオイチ御料ヲトラントノハカリコト成ヘシト其沙汰人口ニマチマチナリ」

○佐久間軍記佐久間常閑物語勝家祝言の条に云う「浅井長政ノ後室ヲ嫁勝家勝家其息女三人トモニ携越前ニ歸ルノ時秀吉走勝家于使曰於帰国道使秀勝信長四男秀吉養子饌膳祝儀ヲ可賀ト勝家慶テ約諾ス然シテ勝家ノ家人等北庄ヲ発清洲迄ノ行路ニ来迎勝家夜半ニ清洲ヲ出告秀勝曰越前ニ急用アルヲ以テ道ヲカネテ夜半ニ此前ヲ通ル間不能応招云々」

○志津ヶ岳合戦事小須賀九兵衛話には清洲會議を安土に作る、当時「挨拶及相違て柴田と太閤互に怒をふくむ其時丹羽長秀太閤と一処に寐ころひ有しか長秀そと足にて太閤に心を付太閤被心得其夜大坂へ御かへり云々」佐久間軍記には「秀吉其夜屢小便ニヨクル」とあり然れどもこれらのこと甫庵太閤記等には見え不審也

○蒲生氏郷後室の墓は今京都の百万遍智恩寺境内に在り、寛永十八年五月九日於京都病没、行年八十一歳、法名相応院殿月桂涼心英誉清熏大禅定尼、秀吉此の後室の容顔秀麗なるを知り氏郷の死後迎えて妾となさんとしたれども後室これを聴かず、ために蒲生家は会津百萬石より宇都宮十八万石に移さる、委しくは氏郷記近江日野町誌を可見

○三味線は永禄年中琉球より渡来したること通説なれどもこれを小唄に合せて弾きたるは寛永頃より始まる由高野辰之博士の日本歌謡史に記載あり尤も天文年中既に遊女の手弄ばれたること室町殿日記に見え好事家は早くより流行歌に用いたる趣同じく右歌謡史に委し、此の物語の盲人の如きも好事家の一人たりし歟、予が三絃の師匠菊原檢校は大阪の人にして今は殆ど廢絶したる古き三味線の組歌を心得られたるが其の中に閑吟集に載せたる「木幡山路に行きくれて月を伏見の草枕」の歌長崎のサンタマリヤの歌其の他珍しき歌詞少からず予も嘗てこれを聞きたることあり詞は短きようなれども同じ句を幾度も繰り返

して唄い且三味線の合いの手は詞よりも数倍長し曲に依りては殆ど琵琶をきく如き心地す
○かんどころのしるしに「いろは」を用いることはいつの頃より始まりしか不知今も浄瑠
璃の三味線ひきは用之由予が友人にして斯道に明かなる九里道柳子の語る所也、本文挿絵
は道柳子図して予に贈らる

于時昭和辛未年夏日

於高野山千手院谷しるす

青空文庫情報

底本：「盲目物語」中公文庫、中央公論新社

1993（平成5）年5月10日初版発行

底本の親本：「盲目物語」中央公論社

1932（昭和7）年2月

初出：「中央公論」

1931（昭和6）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：kompass

校正：酒井裕二

2016年3月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

盲目物語

谷崎潤一郎

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>